

國學院大學學術情報リポジトリ

ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その3) :

「延べ語数」と「異なり語数」の経年分析および「言語計画」の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 和子, 女性と新聞メディア研究会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001123

ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その3)

——「延べ語数」と「異なり語数」の経年分析および「言語計画」の観点から——

田 中 和 子

女性と新聞メディア研究会

はじめに

一 本調査研究の経緯と枠組

二 「延べ語数」と「異なり語数」の経年分析

三 言語計画にむけて

I 「延べ語数」にみる新聞のジェンダー表現二〇

年の推移

一 性別冠詞

1 性別冠詞の「延べ語数」の全般的推移

2 “女”冠詞、“男”冠詞の「延べ語数」の推

移

3 “女性”冠詞、“男性”冠詞の「延べ語数」

の推移

4 “女子”冠詞、“男子”冠詞の「延べ語数」

の推移

5 “女流”冠詞の「延べ語数」の推移と“男

流”

二 性を含み込んだ職業語

1 性を含み込んだ職業語の「延べ語数」の全

般的推移

2 女性の性を含み込んだ職業語は「看護婦」、

男性の性を含み込んだ職業語は「サラリーマ

ン」が最多

3 性を含み込んだ職業語のカテゴリー分類による女男比較

三 他者との関係で女性・男性があらわされることば

1 他者との関係で女男があらわされることばの「延べ語数」の全般的推移

2 他者との関係で女男があらわされる具体的なことばの推移

3 他者との関係であらわされることばのカテゴリー分類による女男比較

II 「異なり語数」にみる新聞のジェンダー表現二〇年の推移

一 性別冠詞

1 “女”冠詞、“男”冠詞の「異なり語数」の推移

2 “女子”冠詞、“男子”冠詞の「異なり語数」の推移

3 “女性”冠詞、“男性”冠詞の「異なり語数」

の推移

4 “女流”冠詞の「異なり語数」の推移と性別冠詞の「異なり語数」の推移に関する全体的傾向

二 性を含み込んだ職業語

1 女性の性を含み込んだ職業語の「異なり語数」の推移

2 男性の性を含み込んだ職業語の「異なり語数」の推移

三 他者との関係で女性・男性があらわされることば

1 他者との関係で女性があらわされることばの「異なり語数」の推移

2 他者との関係で男性があらわされることばの「異なり語数」の推移と女男比較

むすびにかえて——言語計画に向けて
付表

はじめに

一 本調査研究の経緯と枠組

本論の目的は、新聞におけるジェンダー表現が、過去二〇余年の経過とともに、どのような推移をたどってきているのかを、量的データをもとに考察することである。

女性と新聞メディア研究会では、同研究会代表が一九八四年に行った新聞紙面に現れたジェンダー表現・性差別表現の主要形態を洗い出す作業に基づいて、⁽¹⁾それらが実際にどの程度使用されているのかを数量的に明らかにすべく、一九八〇年代半ばより定期的に新聞紙面調査を行ってきた。これまでに、一九八五年、一九九一年、一九九六年、二〇〇一年、二〇〇六年と、ほぼ五年おき、合計五回にわたる調査を実施したが、その結果について、各調査年のデータを詳細に分析し、逐次『国学院法学』等で紹介してきた。⁽²⁾

これまで分析対象としてきたのは、朝日新聞・毎日新聞・読売新聞の朝刊・夕刊(東京都内版)の、各調査年一〇月一日から一五日に掲載された投書、テレビ面・ラジオ面、小説、マンガ、広告(求人広告を含む)⁽³⁾を除く全ての記事である。調査年によっては、求人広告、投書、テレビ・ラジオ面を別個に分析している。

新聞紙面で用いられる女性と男性を異なつて表現する「方法」は、大枠として以下の三つに類型化することが可能である。

I 女性であることを強調する表現

女性冠詞、女性の性を含みこんだ職業語、他者との関係で女性があらわされることば、女性に対するステレオタイプ表現

II 女性の存在が隠蔽される表現

男性が世帯や家族を代表する表現、女性が男性に付随ないし従属させられた表現

III 女性と男性とで扱いの基準が異なるダブルスタンダード表現

女性を業績や地位で扱わない表現、女性と男性とで異なる敬称の使用、女性を名のみ、男性を姓または姓名であらわす表現

これまでの研究では、これらの女性と男性に言及する語や表現の分量の差、またそれらの経年変化をみることにより、新聞記事表現におけるジェンダーによる偏りの実態を明らかにしてきた。

該当語・表現の収集・データ化にあたっては、まず、新聞紙面を複数名がチェックしながら、マーカーで基本類型にそって該当語および表現を塗り分ける作業を行った。そのうち、第三回調査までは、それぞれの語・表現を手作業で分類してから集計していたが、四回目以降は、たとえば女性冠詞には「11」、女性の性を含みこんだ職業名には「12」といったようにコード番号を与え、それをExcelに打ち込み、併せて該当語・表現の載っている記事見出し、掲載日付と朝・夕刊の別、掲載ページ数、掲載面名称、紙面ジャンルなどの情報を入力してデータベースを作成した。これを用いれば、語・表現ごとの出現頻度、紙面ジャンル別、新聞銘柄別のクロス集計などがすぐに行えるようになっていた。

なお、本調査研究が開始以来用いてきた朝日、毎日、読売の三紙は、日本を代表する全国紙であり、〇九年現在、一日につき朝日が八〇二万八五七二部、毎日が三七三万七六三〇部、読売が一〇〇一万八七〇一部販売されて

いる(日本ABC協会調べによる朝刊全国合計、二〇〇九年七月～十二月平均)。三紙を合計するとおよそ二一七
 七万五千部となるが、これは、日本の一日あたり新聞総発行部数約五〇三五万部(日本新聞協会調べによる朝夕刊
 セット紙・朝刊単独紙・夕刊単独紙の合計、〇九年一〇月)の約四三%を占めている。都市部を中心として普及
 し、四割のシェアを持つ全国紙が用いている言語表現が、社会の中で一定の影響力を有していることは、推察に難
 くない。⁽⁴⁾

二 「延べ語数」と「異なり語数」の経年分析

これまでの調査研究においては、おもに、新聞記事に現れた語や表現がそれぞれ合計何回出現するかに注目して
 きた。

しかし、言語変化の方向性を見極めるためには、表現の出現頻度をみることとあわせて、表現の多様性や、表現
 使用の継続性・恒常性についてみることも重要である。たとえば、ある語は、毎回の調査を通じてしつこく居座り
 続けているのに対し、ある語は一回で消えてしまうようなことがある。このような特性を調べることは、ジ
 エンダー表現への実践的な対策を考える上でも、意味のある課題であろうと考えられる。本調査研究においては、
 五回というまとまった調査結果が蓄積された結果、通算で何種類の異なった語が現れたか、また、これらの語を経
 年のにみたときの消長はどうかを観察することが可能になっている。

言語学の考え方を援用すると、語がどの程度新聞紙面で用いられているかを数える方法には、「延べ語数」を用
 いる方法と「異なり語数」を用いる方法の二種類がある。「延べ語数」とは、国語学者伊藤雅光によれば、「個々の
 自立語が同じ単語かどうかにかかわらず、どの単語も同じように一つ二つと数えた単語の総数⁽⁵⁾」をいう。すなわち

同一語が何回含まれていても、それぞれを一単位として総計する数え方で、たとえば、調査期間中の全記事に、女性冠詞「女子」のつく語として「女子学生」が一〇〇回、「女子生徒」が五〇回、「女子高生」が二五回、「女子社員」が五回出てきたとすると、「延べ語数」は、それぞれの出現回数をすべてたした一八〇となる。それに対し、「異なり語数」とは、「違う単語の種類によって、数えた単語の総数⁶」であり、上記の例を用いれば、「女子学生」「女子生徒」「女子高生」「女子社員」合わせて四ということになる。計量語彙論では、「異なり語数」を、語彙の多さを示す指標として、「延べ語数」と合わせて表示することが多い。

ジェンダー表現の研究においても、この数え方を援用するならば、これまでの『国学院法学』等における一連の報告においては、「延べ語数」に主な焦点を当ててきたということになる。しかし、これらの論文中に掲載された表の中には「異なり語数」についての情報もまた、含まれているのである。そこで今回は、「語・表現の多様性」と過去五回の調査を比較して得られる「語・表現の恒常性」の観点から、「異なり語数」にもよりきめ細かく注意を払いながら、考察することにした。なお、本論の文末に、考察の基礎とした集計データを、付表として一括掲載した。

三 言語計画にむけて

ジェンダー表現について、それらの表現を生み出し使用している人間集団や、社会的な背景を考えることは、ジェンダー研究にとって重要な課題の一つである。言語学の分野として台頭してきた社会言語学は、言語の社会的側面を重視する立場をとり、さまざまな言語的課題に答えようとしているという意味で、ジェンダー研究にとっても示唆を与えるものとなっている。

社会言語学のひとつの領域に、言語変化の方向をみきわめ、望ましくない傾向がみられた場合には、健全な方向に向かうように方策を考えるという「言語計画 (language planning)」あるいは「言語政策 (language policy)」という考え方が⁷⁾ある。言語計画とは、ある社会内で用いられている(諸)言語の発展に、ある目的をもって介入することである。言語計画のいくつかの局面のうち、⁷⁾実体計画と呼ばれるものには、言語そのものの育成や語彙の形成、近代化、標準化などが含まれる。

ジェンダー表現は、それ自体社会言語学上の大きなテーマとなっているため、言語計画の問題の一つとしてとらえられることは少なかったが、ジェンダー表現が引き起こす不平等や偏見は、社会の成員の中に言語に関して葛藤を生じさせるという意味で、「言語紛争 (language conflict)」の一つとしてとらえることができる。したがって、その解決に向けて意図的な介入を試みることは、言語計画の一種となりうるものであると考えられる。

本稿においては、最終章で、調査から得られた結果を踏まえ、言語計画に向けた提言を行うこととしたい。

I 「延べ語数」にみる新聞のジェンダー表現二〇年の推移

一 性別冠詞

本研究では、女性または男性を強調する表現として、人の職業、地位、役割などの呼称の上に「女」「男」、「女性」「男性」、「女子」「男子」、「女流」「男流」といった性別をあらわす接頭語がつけられた複合語に注目し、これを性別冠詞(女性冠詞・男性冠詞)と呼んで、長年そのカウントを行ってきた。

「女医」「女性課長」「女子リーダー」のように、頭に性をあらわす「冠詞」がわざわざつけられることによって、本来性別とは無関係なはずの職業や地位、役割などの属性に、女性であることが強く結びつけられて、あたかもそれが報道された事件や事故と不可分であるかのような印象を、人びとに与えてしまうおそれがある。

ここではまず、過去五回、二〇年間の「定期観測」の結果から、女性冠詞、男性冠詞それぞれが毎日どの程度出現し、またその頻度がどのように推移してきているのかをみてみたい。第Ⅰ部で考察の対象とするのは、個々の語が同じ語かどうかにかかわらず、登場した全ての単語を数えた総数、つまり「はじめに」で述べた「延べ語数」である。

1 性別冠詞の「延べ語数」の全般的推移

(1) 女性冠詞の延べ語数は増加傾向

まずグラフ1から、紙面上における女性冠詞全体の延べ語数（使用頻度）の推移をみておこう。

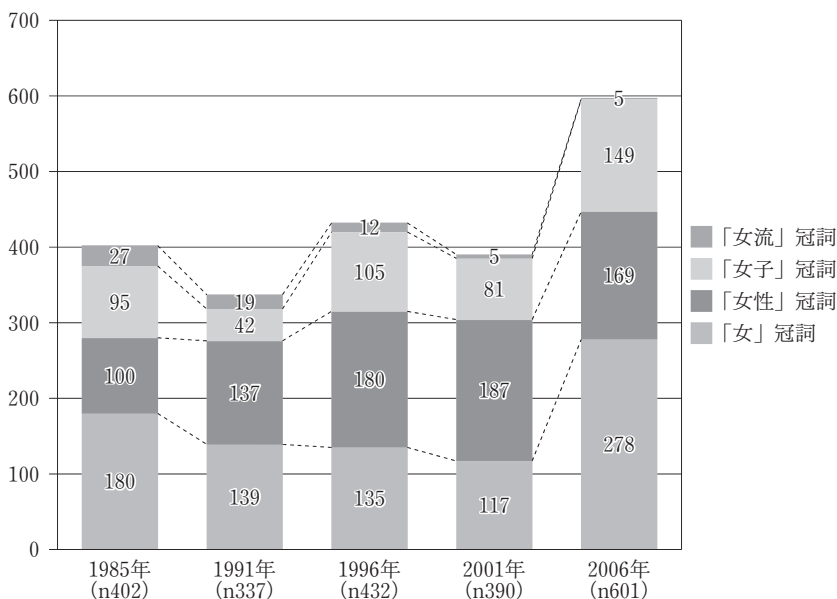
八五年は、「女」がかんむりにつくことばが一八〇件、「女性」がかんむりにつくことばが一〇〇件、「女子」がかんむりにつくことばが九五件、「女流」がかんむりにつくことばが二七件とで、合計四〇二件の女性冠詞がみられた。同様に、九一年は、「女」一三九件、「女性」一三七件、「女子」四二件、「女流」一九件の合計三三七件の女性冠詞が使用されており、九六年は「女」一三五件、「女性」一八〇件、「女子」一〇五件、「女流」一二件の合計四三二件、〇一年は「女」一一七件、「女性」一八七件、「女子」八一件、「女流」五件の合計三九〇件、また、〇六年は「女」二七八件、「女性」一六九件、「女子」一四九件、「女流」五件の合計六〇一件の女性冠詞が数えられ

た。

以上でみたように、四種類の女性冠詞の延べ語数の総計は、八五年は四〇二件、九一年は三三七件、九六年は四三二件、〇一年は三九〇件、〇六年は六〇一件と推移し、増減を繰り返しているが、この二〇年間のスパンでみると、増加する趨勢のように見受けられる。

女性冠詞の種類別にみると、「女」は、〇一年まで減る傾向にあったが、〇六年で大幅に増えた。「女性」は、〇一年まで増加傾向がみとめられたが、〇六年ではやや減少した。一方、「女子」は、増減を繰り返しながら、〇六年には増加幅が大きかった。「女流」については、明らかに減少基調にあると断言はできない。

もとよりこれらの語は、その時々々の事件・事故、政治家や有名人など、記事のトピックによつて左右されてその年だけ増えることがあることにも注意する必要がある。



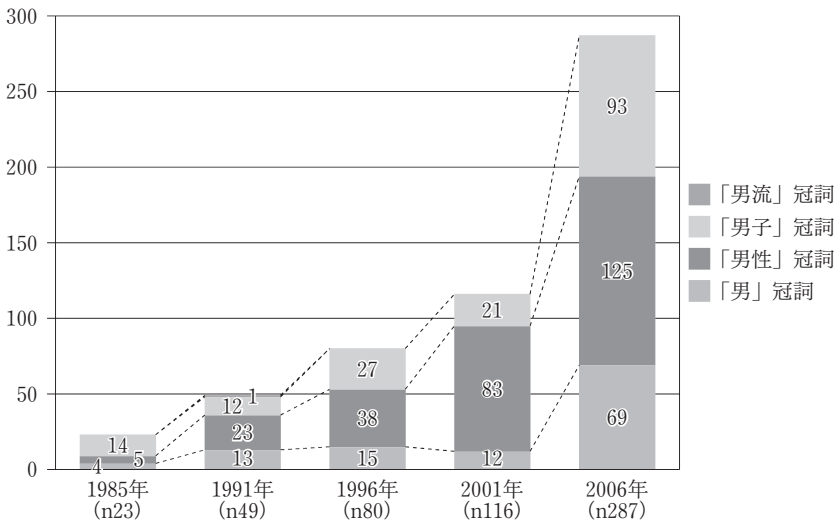
グラフ1 女性冠詞の種類別延べ語数の推移(単位:件)

(2) 男性冠詞の延べ語数は直線的な増加傾向

次に、グラフ 2 から、新聞紙面上で用いられた男性冠詞の延べ語数の推移をみてみよう。

八五年は、「男」がかんむりにつくことが四件、「男性」がかんむりにつくことが五件、「男子」がかんむりにつくことが一四件と、合計二三件の男性冠詞がみられた。同様に、九一年は、「男」一三件、「男性」二三件、「男子」一二件、「男流」一件の合計四九件がカウントされた。九六年は、「男」一五件、「男性」三八件、「男子」二七件の合計八〇件となり、〇一年は、「男」一二件、「男性」八三件、「男子」二一件の合計一一六件と、そして、〇六年は、「男」六九件、「男性」一二五件、「男子」九三件の合計二八七件であった。

以上でみたように、男性冠詞の延べ語数の総計は、八五年二三件、九一年四九件、九六年八〇件、〇一年一一六件、〇六年二八七件と、調査年を追うごとに、右肩上がりの直線的な伸びを示しており、性別冠詞全体に占める割合は、グラフ 3 に示したように一九八五年の五・四％から二〇〇六年の三二・五％へと、三分の一を占めるまでに至っている。



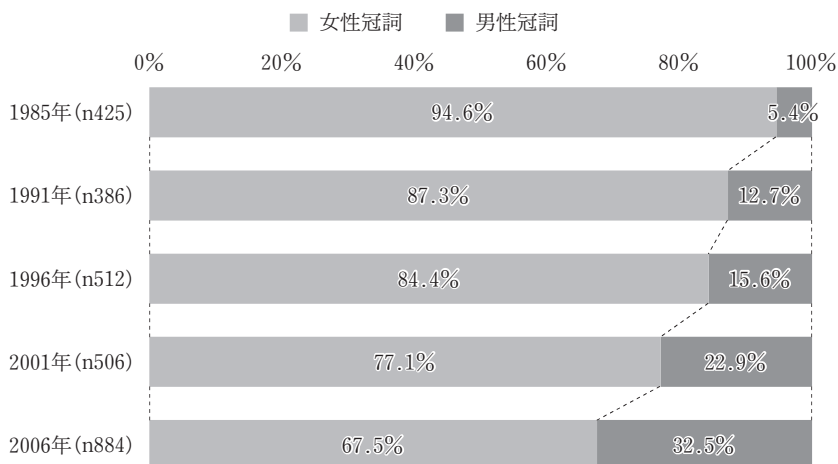
グラフ 2 男性冠詞の種類別延べ語数の推移(単位: 件)

次に、男性冠詞の種類別にみると、「男」は、〇一年に微減したあと〇六年に激増した。「男性」は、〇一年から〇六年にかけて大幅な伸びを示した。「男子」は、〇六年に大きく増加している。なお「男流」は、九一年にのみ「男流作家」という語で一件登場しているが、「女流作家」という呼び方を問題視する立場から意図的に使われた語であり、例外的な使用法といえる。

このように、男性冠詞はその使用頻度が増えていることが、この二〇年の調査で明らかになった。もちろん男性冠詞も女性冠詞と同様、事件や事故などのトピックに左右され、突発的に増加することはあるが、女性冠詞も増えてきていることから、女性であれ男性であれ記事で言及する人物の性を職業や役職などにかんむりをつけて明示する傾向が強まってきているといえるだろう。

(3) なぜ性別冠詞の延べ語数は増加傾向にあるのか

先述のように女性冠詞の延べ語数は、四〇二、三三七、四三二、三九〇、六〇一件と、増減しながらも、二〇年というタイムスパンでは増加しているようにみえ、男性冠詞の延べ語数も、二三、四九、八〇、一一六、二八七件と、毎年一・五倍から二倍の



グラフ3 性別冠詞の延べ語数の男女割合の推移

勢いで増えている。性別冠詞全体でみると、グラフ 3 にみるように、年を追うごとに男性冠詞のウェイトが高くなっているもの、女性冠詞も引き続き増加しているため、読者が、女性冠詞・男性冠詞を問わず、新聞紙上で性別冠詞を眼にする機会は明らかに増えている。

以上みてきたように、新聞記事における女性の有徴化傾向が高まっているようにみえるのは、女性の社会的進出に伴い、政治面や社会面などで扱われることが増えてきたことの反映と解釈できなくもない。しかしながら同時に、男性冠詞も明らかに増える趨勢にあることから、女性の登場機会の増加だけでなく、男性も含め、登場人物の性が記されるべき情報であるとの考え方より広がってきていることのあらわれであるとも考えられる。

その理由として、いくつかの可能性が考えられよう。

まず第一に、性別を記すことが大事な記事上の情報であるという、デスクや記者つまり新聞側の意識が高まっていることが考えられる。

二つめに、読者をはじめとする一般の人びとが、登場人物の性別を知りたがる傾向が強まっているという可能性がある。

三つめに、かつてよりも「人物」について言及される記事が増えている可能性があげられる。

また、四つめに、「人物」が言及される際に、性別に付随する職業や属性などの情報が付加されるようになったという可能性が考えられる。

そして、五つめに、それと関連して、以前のように事件・事故の記事を中心に、「人物」を実名で報道せず匿名にする傾向が強まり、そのために性別およびそれに付随する職業や属性で当事者を表現しようとする記事が増えてきたことが考えられる。

表1 “女”がかんわりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	女優	32	40	39	111	16	27	34	77	24	21	25	70	23	22	22	67	16	37	33	86	411
2	女児	0	1	0	1	4	4	0	8	3	4	0	7	2	0	6	8	38	57	48	143	167
3	女王	4	5	9	18	3	9	6	18	10	8	10	28	8	4	5	17	1	9	5	15	96
4	女神	0	0	4	4	4	3	1	8	1	1	0	2	1	5	0	6	7	1	2	10	30
5	女医	0	3	0	3	0	4	1	5	1	0	0	1	3	0	0	3	0	1	0	1	13
	女生徒	3	3	2	8	0	0	1	1	0	0	3	3	1	0	0	1	0	0	0	0	13
	女帝	0	4	0	4	0	2	0	2	2	0	0	2	0	2	0	2	1	2	0	3	13
8	女学生	1	1	0	2	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	3	0	4	7	11
	女主人	1	1	2	4	0	0	3	3	0	0	1	1	2	0	1	3	0	0	0	0	11
10	女主人公	0	0	0	0	2	0	0	2	1	1	1	3	2	0	0	2	0	1	0	1	8
11	女教師	1	1	3	5	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	女座長	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	女友達	0	0	0	0	2	0	0	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	2	6
14	女高生	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	女スパイ	0	0	0	0	0	3	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	女銀行家	1	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	総 計	46	68	66	180	33	58	48	139	46	43	46	135	44	37	36	117	72	113	93	278	849

注： アミかけはその年の最大合計値(以下同様)

こうした性別情報に関し、読者はどこまで人物の性別を知りたがっているのか、そういったジェンダーを明示する情報はどこまで必要なのか、また、新聞の書き手たちは性という一属性をどうとらえて明示するようにしているのか等を、読者、理念、記者の三方向から、あらためて検討してみることが必要ではないだろうか。

2 “女”冠詞、“男”冠詞の「延べ語数」の推移

(1) “女”冠詞は「女優」「女王」「女神」が定番

次に、性別冠詞の延べ語数を、性別冠詞の種類ごとに、より細かくみていこう。

まず、女性冠詞の中で、“女”がかんわりにつく具体的な語の延べ語数を表1に示した。全五回の調査中、常時トップを占めているのが「女優」で、八五年一一件、九一年七七件、九六年七〇件、〇一年六七件、〇六年八六件と、合計で四一一件にのぼる。八五年の値が目立つのは、フランスの俳優シモーヌ・シニョレの訃報が

各紙に掲載されたことと関連している。それにしても、「女優」ということばには根強いものがある。

「女児」は、五回分の総計では第二位となった。これは、〇一年までは毎回一桁の頻度だったものが、〇六年に一四三件と、膨大な量がカウントされたことによる。〇六年のこの時期、小学校六年生女子の自殺の原因が、学校での「いじめ」だったことが明らかになり、各紙が繰り返し「女児」と報じたためである。したがって、「女児」の延べ語数の多さは一時的なものといえるだろう。それにしても、この場合、一度小学六年の女の生徒であることに言及したあとは、冠詞をつけない「児童」という呼称を用いれば、それで済んだのではないだろうか。

一方、毎回コンスタントに登場するのは五回分の合計で三位、九六件みられた「女王」である。九六年には二八件とやや多く、それ以外は一五件から一八件の間で推移している。九六年の多さは、ゴルフの記事でしばしば使われていたのが要因と思われる。加えて、「女神」も一定数を保っている。このように、「女優」「女王」「女神」といったあたりが「女」冠詞の定番といえそうである。俳優、王、神のいずれも男性が前提とされ、女性のそれらは、「例外」ないしは「特異なもの」として「徴」づけられ、定着していったと思われる語である。

これら上位以外の一つひとつの語の推移をみたところでは、ある語が眼にみえて減り、また逆にある語が明らかに増えてきているといったような明確な消長は、確認できなかった。

(2) 「男」冠詞は「男児」が突出

次に「男」冠詞の延べ語数をみると、表 2 に示したように、全五回分の総計で「男児」が九〇件と最多を占めた。この多さは、〇六年の六三件が大きく作用しており、前述の「女児」同様、一時的なものである。学校、病院での事故、現金強奪事件など、各紙でいろいろな「男児」が登場していた。

表2 “男”がかんわりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	男児	0	0	0	0	5	1	2	8	0	8	1	9	8	0	2	10	17	43	3	63	90
2	男優	1	0	1	2	0	1	0	1	6	0	0	6	0	0	0	0	1	0	3	4	13
3	男友達	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	5
総 計		3	0	1	4	9	2	2	13	6	8	1	15	9	1	2	12	18	45	6	69	113

次いで多いのは「男優」で、合計一三件みられた。〇一年を除いて毎年使われ、九六年に六件とやや多い。しかし、一位の「男児」と比べると、使用頻度は七分の一と、はるかに低い。

それ以外の語では、「男友達」が九一年に四件、〇六年に一件出てきたほかには、特段の消長や定着はみられない。

(3) 非対称な「女」「男」冠詞の根強さ

「女」冠詞の延べ語数全般の推移は、グラフ1ですでにみたように、八五年一八〇件、九一年一三九件、九六年一三五件、〇一年一一七件と、漸減してきていたものが、〇六年には二七八件と一挙にはね上がった。また、「男」冠詞全体の推移は、グラフ2でみたように、八五年四件、九一年一三件、九六年一五件、〇一年一二件と、九一年以降横ばいだったものが、〇六年に六九件と一挙に増加した。これらは、先述したように「女児」「男児」という語が数多く使われたことが大きく影響している。が、双方の使用頻度を比較してみると、「女児」(一四三件)が「男児」(六三件)の二倍以上に達している。実際に事件・事故に遭遇した子どもの女男比に比例しているのか、それとも「女児」の方がニュースバリューがあると判断されて記事として取り上げられる確率がより高いためなのか、その理由はさらに検討してみる必要があるが、いずれにせよ、ひとたび女の生徒がかかわる事件等が生じて報じられるとき、「男優」の七倍近い頻度で使用されている「女」冠詞第一位の「女優」の場合

と同様に、その生徒が女性であることを強調する慣用的な用法がすぐに飛び出してしまふ、新聞メディアにおける言語使用のハビトウスのありようは、あらためて吟味されるべき課題であるといえるだろう。

ところで、「女」がかんむりつくことばは、「ジョ」「オンナ」「メ」の読みの違いにより、三種類に下位分類することができる。まず、読みが「ジョ」の冠詞は、八五年一五二件、九一年一三件、九六年一一六件、〇一年九八件、〇六年二五五件で、〇一年まで減少傾向にあったものが〇六年に大幅に増加した。これは、先にも述べたように、「いじめ」による自殺で「女児」が多用されたことによる。読みが「オンナ」の冠詞は、八五年二四件、九一年一八件、九六年一七件、〇一年一三件、〇六年一三件と、減少する傾向にあるようだ。「おんな〇〇」という訓読みは、一種生なましい語感があるためか、徐々に避けられるようになっていくのかもしれない。読みが「メ」の冠詞は「女神」のみであるが、八五年四件、九一年八件、九六年二件、〇一年六件、〇六年一〇件と推移しており、常時みられる根強い語である。

一方、「男」がかんむりにつくことばの読みは、「ダン」「オトコ」の二種類で、「オ」の読みの語は皆無であった。まず、読みが「ダン」の冠詞は、八五年三件、九一年九件、九六年一五件、〇一年一〇件、〇六年には六八件へと推移した。〇六年で大きく増えたのは、これも先に述べたように「男児（ダンジ）」が突出したことが原因となっている。また、読みが「オトコ」の冠詞は、八五年一件、九一年四件、九六年〇件、〇一年二件、〇六年一件と、変化はあまりうかがえない。

「女児」「女優」に続き、「女王」「女神」「女医」「女帝」など、「女」冠詞つきで量的に上位にある語に対応する「男」冠詞つきの語は、唯一「男神」を例外として、まったくみあたらない。男性に対しては、「男」冠詞のつかない「王」「神」「医者」「帝」など、無徴の語が用いられているのである。これは、使用頻度が中位・下位の「女」

冠詞つきの語についても、おおむね同様のことがいえる。これらの職業や地位をあらわす語の多くは、男性が就くことが前提あるいは伝統とされてきたものであるが、現在ではそういった固定的な前提や伝統は変化しつつあり、実際に女性がこれらの職業や地位に就くことも珍しくなくなっている。

こういった、女性のみを有徴化する片面的なことばは、すでに時代遅れとなっている。通常は性別を表示しないニュートラルな語のみで表現し、どうしても性別を表示しないといけない場合には「女の○○」とあらわすことでこれまでの片面性は解決していきけるのではないだろうか。のちに示す、言語計画・言語政策の問題でもある。

3 “女性”冠詞、“男性”冠詞の「延べ語数」の推移

(1) “女性”冠詞は流動的で「できごと」に左右される

表3から、“女性”がかんむりにつくことばの延べ語数の推移をみると、五回分総計でトップは「女性記者」となっている。過去には一〜二件程度で推移していたものが〇一年に二三件へと大きく増えたことが影響しているが、この年の9・11の米・同時多発テロに関連して、アフガニスタンで英国の記者が拉致・解放されたことを報道する際に、このことばが多く使われたことによる。

「女性記者」に続く“女性”冠詞の第二位は「女性作家」である。特に、一九九一年の九件と二〇〇一年の一三件の使用が目立つが、九一年は、南アフリカの作家ナディン・ゴードイマがノーベル文学賞を受賞したこと、〇一年は、女性の作家に関する日中シンポジウムが開催されたことが影響している。また、三番目に多い「女性職員」は、9・11に関連して、メディアに炭疽菌が送りつけられた事件の記事で多く使用されていた。

表 3 “女性” がかんむりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	女性記者	2	0	0	2	1	1	0	2	0	1	0	1	4	9	10	23	0	7	3	10	38
2	女性作家	0	0	1	1	5	3	1	9	4	2	0	6	2	5	6	13	0	4	3	7	36
3	女性職員	2	0	0	2	1	5	1	7	4	1	1	6	0	9	8	17	0	2	1	3	35
4	女性会社員	0	0	0	0	2	0	0	2	4	2	2	8	1	0	2	3	3	4	7	14	27
5	女性社員	0	1	1	2	0	0	0	0	3	1	0	4	2	7	5	14	0	4	1	5	25
6	女性議員	0	1	0	1	3	1	1	5	5	10	2	17	0	0	0	0	0	0	0	0	23
7	女性監督	0	0	0	0	0	3	0	3	1	2	4	7	0	1	6	7	0	1	2	3	20
8	女性候補(者)	0	0	0	0	0	0	0	0	9	7	3	19	0	0	0	0	0	0	0	0	19
9	女性医師	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	1	11	14	15
	女性詩人	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	3	11	3	0	0	3	0	1	0	1	15
11	女性歌手	0	0	2	2	1	0	0	1	1	0	3	4	0	0	4	4	0	0	2	2	13
12	女性従業員	0	1	1	2	1	0	0	1	0	0	0	0	1	2	5	8	1	0	0	1	12
13	女性客	0	0	1	1	2	1	0	3	0	2	0	2	0	0	2	2	1	0	2	3	11
	女性教師	0	0	2	2	1	1	0	2	0	0	1	1	2	1	0	3	0	2	1	3	11
15	女性教諭	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	2	0	3	3	6	9
	女性大使	0	0	0	0	1	3	2	6	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	9
17	女性スタッフ	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2	2	0	0	3	3	0	0	1	1	8
	女性ファン	0	1	1	2	0	1	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	8
	女性患者	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	4	4	1	1	0	2	8
	女性技術者	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	7	0	0	1	1	0	0	0	0	8
	女性研究者	1	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	3	0	0	3	8
	女性店員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	3	1	1	5	1	0	0	1	8
23	女性ジャーナリスト	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	3	2	0	5	7
	女性経営者	0	1	0	1	0	1	0	1	1	1	0	2	0	0	1	1	1	1	0	2	7
	女性市長	0	0	0	0	0	5	0	5	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	女性秘書	5	0	0	5	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7
総 計		47	25	28	100	37	67	33	137	70	58	52	180	42	64	81	187	44	63	68	175	773

“女性”冠詞の場合、毎回のうに多く使われ、定番化している語は、“女”冠詞ほどにはみられない。あえて指摘するならば、事件、選挙、ノーベル賞などトピックに左右されて、特定のことが増減している。

記者、作家といった職業への女性の進出、また、職員、会社員、社員として企業で働く女性の増加を反映して、“女性”がかんむりにつけられて表記される機会が増えているように見受けられる。

(2) “男性”冠詞は「男性会社員」

「男性教諭」が定着傾向か

表 4 にみるように、“男性”がかんむりにつくことばの延べ語数

表4 “男性”がかんむりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	男性会社員	0	0	0	0	0	1	0	1	6	2	4	12	2	7	3	12	0	5	7	12	37
2	男性教諭	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	1	1	2	2	9	13	3	7	3	13	30
3	男性職員	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3	1	8	12	0	0	1	1	14
4	男性社員	0	0	0	0	2	0	0	2	1	0	0	1	1	4	1	6	0	1	2	3	12
5	男性巡査長	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	7	11	11
6	男性患者	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	2	0	0	2	1	0	4	5	10
7	男性教師	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	5	2	7	9
	男性店員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	2	2	2	6	9
9	男性客	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	2	0	2	4	7
	男性従業員	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	2	0	0	2	1	2	0	3	7
11	男性教員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	6	0	0	0	0	0	6
	総 計	1	2	2	5	9	9	5	23	15	11	12	38	22	29	32	83	29	48	48	125	274

は、「男性会社員」が総計三七件でトップを占めている。八五年には皆無だったものが九一年に一件、その後九六年からは毎年二件登場し、「男性会社員」という呼称が定着している。特に〇一年の読売では、高校教諭が行方不明になっていた記事で、この語が六回も使用されていた。

総計で二番目に多い「男性教諭」も、八五年にはゼロ件、九一年三件、九六年一件だったものが、〇一年、〇六年にはともに一三件登場しており、定着したかのようである。

一四件の「男性職員」は、〇一年のみ一二件と特化しているが、これは、先の「女性職員」と同じく、9・11後の炭疽菌事件で使われていたことが要因となっている。また、一二件の「男性社員」は、八五年から常時みられるようになっていたが、〇一年に六件とやや多くなっている。

そのほか常時みられる男性冠詞つきの語には、数件ではあるが九六年からの「男性患者」「男性従業員」などがあり、また単一の調査年に特化したものとしては、〇一年の「男性教員」一二件、〇六年の「男性巡査長」一件、「男性教師」七件、「男性店員」六件などがあげられる。いずれも、その時どきの事件・事故に左右されての値である。

(3) “女性” “男性” 冠詞の延べ語数の増加と平行表現

“女性” 冠詞の延べ語数は、グラフ 1 でみたように、八五年一〇〇件、九一年一三七件、九六年一八〇件、〇一年一八七件、〇六年一七五件と、九六年に大きく増加してからは一定の量で推移している。それに対して “男性” 冠詞の延べ語数は、グラフ 2 に示したように、八五年五件、九一年二三件、九六年三八件、〇一年八三件と、毎年二～三倍の勢いで増えてきており、〇六年には一二五件が数えられた。“女性” がかんむりにつく語の増加傾向は、種類別にみた性別冠詞の中で、最も激しいものとなっている。“女性” 冠詞と “男性” 冠詞に頻度の差はまだあるとはいえ、男性の職業や地位に “男性” 冠詞がつけられる傾向が、明らかに増しつづけるといっていいだろう。個別の職業では、「教諭」や「巡査長」につけられているとともに、女性冠詞同様、会社員、職員、社員といった職場で働く人一般をさして用いられる語に冠せられる場合も多い。

いずれにせよ、“女性” “男性” 冠詞は、女男双方に冠詞がつけられる対称的な語が “女” “男” 冠詞よりも比較的多い。女性がさらに社会に進出することによって、そうした双方に “女性” 冠詞 “男性” 冠詞がつく平行表現がさらに増えるのか、あるいはそういった性別情報を付帯する意味が薄れて、女男ともに無徴表現になっていくのか、その推移を見定める必要がある。

4 “女性” 冠詞、“男性” 冠詞の「延べ語数」の推移

(1) “女性” 冠詞は会社員関連が減り、生徒・学生関連は常駐・増加の傾向

“女性” がかんむりにつくことばの延べ語数は、表 5 に示したように、学校（中学・高校・短大・大学）の生

表5 “女子” がかんむりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	女子高生	2	2	1	5	2	0	1	3	11	12	18	41	5	1	7	13	12	19	9	40	102
2	女子生徒	0	3	5	8	0	0	1	1	3	4	2	9	5	15	13	33	2	18	8	28	79
3	女子学生	4	0	6	10	1	2	4	7	5	3	2	10	0	3	1	4	6	5	8	19	50
4	女子大生	5	5	3	13	5	3	3	11	2	4	0	6	2	4	0	6	5	3	5	13	49
5	女子中学生	9	12	8	29	0	0	0	0	1	0	5	6	3	3	1	7	0	3	2	5	47
6	女子高校生	2	0	2	4	0	0	1	1	1	8	3	12	1	0	3	4	10	2	2	14	35
7	女子児童	0	1	0	1	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	1	1	2	5	5	12	32
8	女子中高生	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	2	8	0	0	0	0	0	2	0	2	10
9	女子職員	1	1	1	3	2	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	女子社員	1	2	0	3	0	2	0	2	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7
11	女子短大生	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	2	3	5	0	0	0	0	0	6
12	女子大生社長	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5
13	女子留学生	1	1	0	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	女子選手	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	4
	女子行員	0	0	1	1	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
16	女子労働者	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	女子プロレスラー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	3	3
	女子アナ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	3
総 計		31	33	31	95	11	15	16	42	29	43	33	105	19	33	29	81	42	61	46	149	487

徒・学生に関するものが圧倒的に上位を占め、年によって増減はあるが、“定番もの”となっている。

凸凹の比較的数量の少ない定番は、「女子大生」である。

比較的数量にむらのない「女子学生」「女子大生」以外は、その時期のできごとによってたまたま増えたものもあり、たとえば八五年の「女子中学生」「二九件は、テレビ局が女子の中学生たちによるリンチ行為を「やらせ」で行わせていた事件が明らかになったこと」によっている。九六年は、「女子高生」四一件を筆頭に「女子高校生」「女子中高生」が特出しており、これは「非行」や「援助交際」が社会問題化したためである。

○一年の「女子生徒」三三件は、特定の事件・事故によるものではなく、生徒同士の殺傷事件や「いじめ」による自殺など、多様な事件・事故が数を増やした要因となっている。そうした中、〇六年は、女の生徒に関する冠詞つき表現が、「女子高生」四〇件、「女子生徒」二八件、「女子学生」一九件、「女子高校生」

表 6 “男子” がかんむりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	男子生徒	1	2	3	6	0	1	7	8	4	8	2	14	3	6	2	11	13	23	31	67	106
2	男子学生	1	1	0	2	1	2	0	3	0	0	1	1	0	0	1	1	2	7	6	15	22
3	男子高校生	0	1	1	2	0	0	0	0	2	3	1	6	2	0	0	2	0	1	0	1	11
4	男子児童	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	1	2	1	4	6
5	男子大学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	1	1	0	2	4
6	男子選手	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	3	0	0	0	0	3
	男子中学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	2	3
	総 計	2	7	5	14	1	4	7	12	6	16	5	27	6	7	8	21	19	35	39	93	167

一四件と、調査開始以来の突出を示しているが、これは男性によるわいせつ行為や未遂事件の記事などで、頻繁に使われたことによる。

これらの調査結果からは、「女子高生」を中心とした記号が、この年代の若い女の生徒たちに対する世間のまなざしと、彼女らのアイデンティティ主張、ふるまいなどが相俟って、テレビ・雑誌といった大衆メディア上だけでなく、新聞においても数多く使われている実態が読みとれる。

“女子”冠詞の消長をみると、定番ものである生徒・学生をさす語が、調査時のトピックのいかんによつて増減はあるものの、経年とともに増えてきていることが大きな特徴といえる。事件・事故に生徒・学生たちが巻き込まれることのほかに、若い女性たちが何かと話題になり商品化される時代を反映しているようでもある。

一方、「女子職員」「女子社員」という職業名に“女子”冠詞をつけるいい方は、ほとんど使われなくなっている。女性の職業進出にともない、未成年であるという響きの強い「女子○○」は使われなくなり、かわりに「女性○○」という語で表現されるようになってきているのではないだろうか。

(2) “男子”冠詞は「男子生徒」「男子学生」が定番、「男子高校生」も根強い

“男子”がかんむりにつくことばの延べ語数は、表 6 に掲げたように、「男子生徒」が総数にして一〇六件で最多となっている。この二〇年間、“常連”の語とし

て、各年六件から一四件の間を推移してきたが、〇六年に六七件へと大幅に増えたのは、「いじめ」により中学二年生が自殺した事件が起こり、各紙が連日報道したためであり、やや例外といえそうだ。しかしながら、「男子生徒」といういい方は、定着してきているとみてよいだろう。

全体で二二件みられる「男子学生」も〇六年だけが一五件と多いが、これも毎回のよう顔を出す語である。また、「男子高校生」は九一年を例外として、ほぼ毎回みられる語となっており、「男子大学生」も九六年から使われるようになっていく。

一方、「男子児童」ということばは、九六年まではみられなかったが、〇一年、〇六年と使われるようになっていく。本調査の経過の中では比較的最近用いられるようになった語といえる。「男子大学生」は九六年から使われるようになっていく。

以上のほかには、「男子」冠詞の消長を読み込めるような数値はみあたらない。

(3) “女子” “男子” 冠詞のダブルスタンダード

“女子”冠詞の延べ語数の過去五回の推移は、グラフ1でもみたように、九五件、四二件、一〇五件、八一件、一四九件と、増減を繰り返しながら、やや増える趨勢にあるように見受けられる。調査時期によって「女子高生」の出現頻度が高かったり、「女性生徒」の頻度が高かったり、あるいは「女子中学生」という表現が突出したり、その時どきのできごとによってまちまちではあるが、“女子”の生徒や学生たちは、“男子”の生徒や学生たちに比べ、新聞メディアにおいても頻繁に露出させられ、好奇の眼にさらされている。一方、“男子”冠詞は、グラフ1でわかるように一四件、一二件、二七件、二二件と推移したのち、〇六年になって九三件と、特異な数値を示して

いる。これは、先述のように、この年、いじめによる自殺事件で「男子生徒」が六七件も登場したからである。しかしながら、全般的にみれば、女男差は歴然としており、「男子」がかんわりにつく語よりも「女子」がかんわりにつく語の方が、常にはるかに多く出現している。

このように「女子」「男子」冠詞のつく語は、学校の生徒に関係したものが常に上位を占めるが、両性の間で微妙な呼び分けがなされている。「女子」で総計のトップは「女子高校生」一〇二件であるが、「男子高校生」は全調査を通じても数件しか出現していない。代わりに「男子高校生」が三位で一一件みられるが、それと「女子」冠詞六位の「女子高校生」を比較してみると、後者は三五件ではるかに多い。一方、「女子生徒」「男子生徒」は、〇六年を除いてそれほどの差はみられない。

女の高校生は、「女子高校生」と呼ばれることが新聞においても一般化しており、それに比べると、「女子高校生」と呼ばれる度合いは低い。それに対し、男の高校生は、時として「男子高校生」と呼ばれることはあっても、「男子高校生」と呼ばれることはほとんどない。「女子高校生」という呼び方に、ある種のイメージが固定化され、常用化されている状況がうかがえよう。

同様に毎回コンスタントにみられる「女子学生」五〇件も、「男子学生」一二件に比べて使用頻度が高い。「女子大生」四九件も「常連」の語であるが、「男子大生」という語はなく、ごくまれに「男子大学生」とあらわされる一方、「女子大学生」はほとんどみられない。女の大学生の場合も「女子高校生」の場合と同様に、「女子大生」と呼ばれるのである。

表7 “女流”がかんむりにつく語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	女流作家	1	8	3	12	1	5	4	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	23
2	女流棋士	0	0	0	0	0	2	0	2	0	1	4	5	0	1	0	1	0	0	0	0	8
3	女流陶芸家	0	1	0	1	0	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
4	女流音楽家	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	女流画家	0	0	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	女流作曲家	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	女流詩人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	2
	女流日本画家	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	2
	女流義太夫	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2	2
総 計		2	13	9	24	2	13	4	19	2	4	4	10	0	2	3	5	0	4	1	5	63

5 “女流”冠詞の「延べ語数」の推移と“男流”

(1) “女流”冠詞は使われなくなる方向へ

“女流”がかんむりにつくことばの延べ語数は、表7に示したように、「女流作家」が総計二三件で首位であるが、八五年には一二件、九一年に一〇件みられたのちは、ほとんど使われなくなっている。同様に、「女流陶芸家」「女流画家」などもみられなくなり、あとはまれに“女流”冠詞つきで将棋や囲碁の棋士、日本画家、義太夫の語り手などが出現する程度である。

○六年調査の結果を分析した『国学院法学』第四六巻第四号で筆者たちは、「女流」は男性の“垂流”の感が否めないと指摘したあと、「囲碁や将棋の世界でも女性の活躍が目立ってきている現在、女性の棋士らも男性と対等なプロフェッショナルとして扱い、“女流”というかんむりを冠して彼女たちを呼ぶ習慣を、そろそろ改めるべく時にきているのではないだろうか」と提言したが、いまだにその動きはみられない。

将棋や囲碁の世界では、「女流棋聖」「女流名人」など固有の称号が使用されているが、本調査研究では、そうした固有名詞は女性冠詞のカウントから除外している。しかしながら、こういった固有のタイトルや段位について、ジェンダーを取り払った名称が用いられていいのではないだろうか。

同様のことは、スポーツにおける種目名称についてもいえる。たとえば「サッカー」のように、無徴は男性の競技を意味し、性別をつけるのは女性の競技のみという片面的な競技名や競技種目が数多く存在する。スポーツにおけるジェンダー平等化の趨勢の上からも、またこういったスポーツ名称がジェンダー差に関する固定観念を植えていているという面からも、種目やタイトルにおける女性冠詞付きの名称は、再考したほうがよいのではないだろうか。

(2) “男流” という語の不在

“男流” という冠詞は、九一年に「女流作家」という語に対抗的に使用された「男流作家」だけである。

「流」とは、「流派」「流儀」といった、芸能、技能・技術、武芸などの伝統・伝承をあらわす呼称であり、家元や開発者、師範などの名や技法が「○○流」のようにつくのが一般的であろう。それを、「女(男)」というジェンダーでひとからげに「女性(男性)の流儀」としてしまうのは、名づけのレベルが異なるし、無理がある。内容別のカテゴリ分類に、同じ範疇上で性別のカテゴリを用いて並べることは、たとえば『出版年鑑』の雑誌分類名に、総記、社会科学、読み物、芸術、工学などと並んで「女性」とあるようなものであり、違和感を抱く人は少なくあるまい。

“男流” ということばがそもそも存在しないところに、出現頻度に大きな差はあるものの、一応“女／男”“女性／男性”“女子／男子”のような、対表現のある他の性別冠詞と“女流”との違いがある。この語は歴史的に固有なものをあらわす際に限定的に使用されることはあっても、早晚死語となっていくだろう。

二 性を含み込んだ職業語

性を含み込んだ職業語とは、職業をあらわすことばの中に、女性あるいは男性のジェンダーが組み込まれているものをさす。

たとえば、長年使われてきた「看護婦」や「保育」などのように「〇〇婦」「〇〇母」「〇〇嬢」を、あるいは「〇〇レディー」や「〇〇ウーマン」を語尾につけて女性の職業をあらわしたり、「サラリーマン」や「車夫」のように、「〇〇マン」「〇〇夫」「〇〇ボーイ」「〇〇父」などを語尾につけて男性の職業をあらわす語が、この世の中には数多く存在し、新聞でもしばしば使われている。

こうした慣用的に用いられる性を含み込んだ職業語を、ジェンダー中立的なものにしてゆくことは、ニュートラルな語の採用や新しい語をつくり出し、普及させる必要があるため、性別冠詞をなくしていくこと以上に、困難を伴う作業となるだろう。しかしながら、一九九七年の改正雇用機会均等法において募集職業名に関するガイドラインがつくられ、「スチュワーデス」を「客室乗務員」や「キャビンアテンダント」に、「看護婦」を「看護師」に、「カメラマン」を「写真記者」などに言い換えて、女男どちらをも意味するようにしたことで、現在では、それらのことばがある程度定着しつつある。男性が就くことが自明視されてきた職に女性が進出し、逆に女性向けとされてきた職に男性が参入することで、強固な性別役割分業の実態や意識、また、それをあらわす表現も、徐々にではあるが変わっていくと予想される。

ここでは、これまで五回分のデータから、女性の性を含み込んだ職業語、男性の性を含み込んだ職業語の延べ語数がどのように推移しているのか、分析を行う。

1 性を含み込んだ職業語の「延べ語数」の全般的推移

(1) 女性の性を含み込んだ職業語の延べ語数は増加ののち減少の方向へ

女性の性を含み込んだ職業語の延べ語数の推移を表 8 でみると、八五年は一六九件、九一年は一六二件、九六年は二五七件、そして〇一年は一八二件、〇六年は一四九件と推移しており、調査開始年から九六年にかけて大きく増加したあと、少しずつ減少してきている。

性を含み込んだ職業語の延べ語数も、性別冠詞の場合と同様に、その時どきの事件・事故などのトピックによって変動することから、一貫した傾向は見い出しづらい。全体で一位の「看護婦」は、二〇〇一年に、先にも述べたように一九九七年改正雇用機会均等法によるその語での求人禁止以後であるにもかかわらず、使用数が六六件と、これまでの最高を数えた。これは、横浜の病院で九九年に患者を取り違えて手術した事故に関して、地裁の出した無罪判決を地検が控訴したニュースなどが影響しているためだが、用語には注意すべきであった。〇六年には、使用数は大きく減じている。

また、全体で第四位、第五位に位置づいている日本軍戦時性奴隷の女性たちを呼称した「(元)従軍慰安婦」ということば、「(元)慰安婦」ということばが、それぞれ九六年に一四件と一八件、〇六年に二六件と三件と、多く使用されているが、前者は当時の安倍晋三首相の歴史認識について国会でのやりとりが、後者は「女性のためのアジア平和国民基金」(アジア女性基金)の、元戦時性奴隷の女性たちへの「償い金」支給に関して、ともにニュースになったため生じた一時的な現象である。

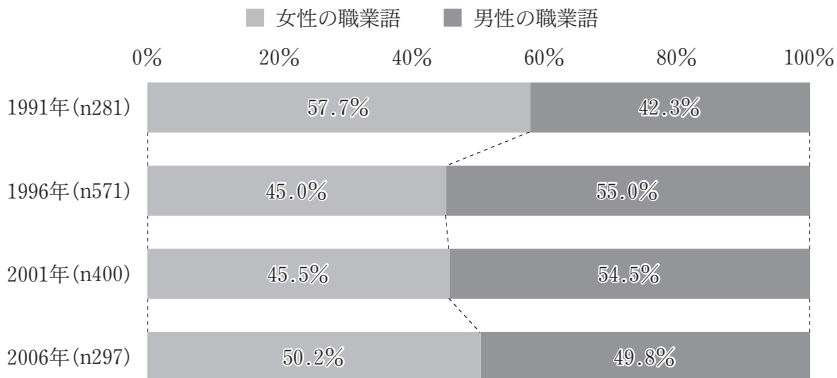
表8 女性の性を含み込んだ職業語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	看護婦	1	2	3	6	2	18	17	37	3	14	17	34	28	15	23	66	13	0	0	13	156
2	OL・OL嬢	16	17	11	44	8	14	13	35	10	3	5	18	3	3	4	10	3	6	4	13	120
3	ヒロイン	0	0	0	0	0	0	1	1	6	9	1	16	4	1	5	10	2	6	9	17	44
4	従軍慰安婦・元従軍慰安婦	0	0	0	0	0	0	0	0	6	8	0	14	0	2	0	2	3	12	11	26	42
5	慰安婦・元慰安婦	0	0	0	0	0	0	0	0	10	7	1	18	6	1	0	7	0	2	1	3	28
6	おかみ・おかみさん・女将	0	0	0	0	1	0	0	1	4	0	11	15	2	1	0	3	2	1	1	4	23
7	助産婦	0	0	0	0	0	4	0	4	1	2	10	13	2	3	0	5	0	0	0	0	22
	娼婦	0	0	1	1	3	2	2	7	2	0	7	9	1	0	0	1	1	3	0	4	22
	保母	1	4	0	5	3	3	0	6	0	6	2	8	0	1	0	1	0	0	2	2	22
10	ホステス	2	1	2	5	1	0	0	1	0	1	1	2	7	3	1	11	0	0	0	0	19
	家政婦	2	1	1	4	0	1	8	9	1	3	0	4	1	1	0	2	0	0	0	0	19
	保健婦	0	0	0	0	0	2	0	2	1	2	5	8	3	0	6	9	0	0	0	0	19
13	遊女	0	0	0	0	0	2	2	4	3	1	1	5	1	0	0	1	3	0	0	3	13
	(クラブ・店の)ママ	0	0	0	0	5	0	0	5	4	0	0	4	0	0	0	0	4	0	0	4	13
15	生保レディー	0	0	0	0	0	0	0	0	10	1	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	12
16	代理母	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	11	11
	乳母	0	0	0	0	2	3	1	6	0	0	0	0	1	0	0	1	0	4	0	4	11
	魔女	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	2	6	0	3	0	3	1	0	1	2	11
19	キャリアウーマン	2	0	2	4	0	0	1	1	0	2	0	2	0	1	0	1	0	1	1	2	10
	海女	0	1	0	1	1	0	4	5	0	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	10
21	スチュワーデス	0	0	1	1	0	0	0	0	2	3	3	8	0	0	0	0	0	0	0	0	9
22	ウェイトレス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	2	0	3	0	3	0	3	8
	お姫様・姫	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	4	8	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	歌姫	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	1	2	1	4	1	1	0	2	8
	修道女	0	0	0	0	2	1	0	3	0	0	3	3	0	0	0	0	1	0	1	2	8
26	芸者	0	0	0	0	3	2	2	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	女中	0	0	0	0	0	1	2	3	0	0	1	1	0	3	0	3	0	0	0	0	7
	総計	28	32	29	89	37	64	61	162	87	84	86	257	74	66	42	182	47	47	55	149	839

(2) 男性の性を含み込んだ職業語は女性と対にならない

男性の性を含み込んだ職業語の延べ語数の推移は、表 9 に示したように、カウントを始めた九一年が一一九件、九六年三二四件、〇一年二一八件、〇六年一四八件と、こちらもトレンドは一貫していないようだ。しかしながら、全四回の調査で七九九件の男性の性を含み込んだ職業語が使われており、女性のそれ（同時期四回で七五〇件、一九八五年からの全五回で八三九件）と比べて、数の上では決して少ないわけではない。性を含み込んだ職業語全体の中で、各調査年の女男それぞれの性を含み込んだ職業語の相対的比率を示したグラフ 4 から、両者が、ほぼ半々で推移していることがわかる。

表 9 に戻ると、九六年の男性の性を含み込んだ職業語の延べ語数の多さが目立っている。この年は、「サラリーマン」「カメラマン」「オンブズマン」など「マン」のつく語と「ホスト」「OB」が、例年にも増して多かったからである。その理由は個別のデータの推移を紹介するときに述べるが、「サラリーマン」と「OB」という語は、募集・採用にかかわる語ではないため、改正雇用機会均等法における表示禁止の対象にはなっていない。女の会社員という意味で、「サラリーマン」に対応する女性をあらわす語、たとえば「サラリーウーマン」「サラリーレディ」という語が使わ



グラフ 4 性を含み込んだ職業語の延べ語数の女男割合の推移

表9 男性の性を含み込んだ職業語の各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	サラリーマン	12	13	14	39	33	13	31	77	19	9	15	43	3	21	4	28	187
2	OB	0	0	0	0	20	36	3	59	1	3	0	4	21	19	3	43	106
3	カメラマン	1	6	3	10	8	13	4	25	7	6	6	19	1	1	0	2	56
4	スポークスマン	0	0	0	0	11	3	1	15	13	13	4	30	1	7	0	8	53
5	証券マン	13	16	17	46	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	48
6	ヒーロー	0	0	0	0	10	2	0	12	8	5	3	16	0	4	9	13	41
7	ビジネスマン	0	1	2	3	1	2	1	4	5	3	9	17	1	8	2	11	35
9	ホスト	0	0	3	3	0	14	6	20	2	0	0	2	0	0	0	0	25
9	オンブズマン	0	0	0	0	5	8	6	19	1	0	0	1	1	0	0	1	21
	営業マン	1	0	0	1	0	4	5	9	10	1	0	11	0	0	0	0	21
11	神父	0	0	0	0	5	9	0	14	0	0	0	0	0	2	0	2	16
12	英雄	0	0	0	0	6	0	0	6	4	0	0	4	3	0	0	3	13
	商社マン	1	3	1	5	0	2	0	2	0	1	2	3	2	0	1	3	13
14	スポーツマン	0	0	1	1	0	1	1	2	1	1	4	6	0	0	0	0	9
15	紳士	0	0	0	0	0	0	2	2	0	1	1	2	1	3	0	4	8
16	皇子	0	0	0	0	7	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	7
17	車夫	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6	0	0	0	0	6
18	セールスマン	0	0	0	0	1	0	0	1	3	0	1	4	0	0	0	0	5
	侍・サムライ	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	1	1	5
	武者・若武者	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	2	4	5
21	キーマン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3	0	1	0	1	4
	ジャズマン	1	0	0	1	2	0	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	4
	チェアマン	0	0	0	0	2	0	1	3	0	1	0	1	0	0	0	0	4
	ラッキーボーイ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4	4
	リードオフマン	0	0	0	0	1	0	1	2	1	0	1	2	0	0	0	0	4
	銀行マン	1	0	0	1	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	殿様・殿サマ	0	0	0	0	0	4	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4
	看護師・准看護師	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	3	0	0	0	0	4
総 計		32	42	45	119	119	123	72	314	107	61	50	218	38	80	30	148	799

れることはほとんどなく、非対称的な「OL」が対語となつていふと考へられる。男性の性を含み込む「サラリーマン」という語が、女男を含む会社員一般をさして用いられてゐることも、のちに示すように、問題である。

「OB」に対応する女性をあらわす語としては「OG」という対語が存在するが、このことばが二〇年間に新聞紙面上で使われたことは、一度もなかつた。

以上みてきたように、職業語は、女男で対になつてゐる語もあるものの、性別冠詞とは異なり、女性と男性とで別べつのことばが多い。つまり、女性・男性が従事する仕事の「中身」や「質」の違いが、そのままことばにあらわれているのである。このことは、のちに、これらの職業語をカテゴリー分類して、比較してみると、より鮮明になるであらう。

2 女性の性を含み込んだ職業語は「看護婦」、男性の性を含み込んだ職業語は「サラリーマン」が最多

(1) 「看護婦」「OL」は減少傾向、「慰安婦」は政治とともに

表 8 により、女性の性を含み込んだ職業語を、少し細かくみてみよう。

全五回分を合計して一位となつた「看護婦」は、八五年六件、九一年三七件、九六年三四件、〇一年六六件、〇六年一三件と推移してゐる。〇一年に多かつたのは、先にその理由を記したとおりである。

次いで、総計で二番目に多い「OL・OL嬢」は、かつては八五年四四件、九一年三五件のように、「常連」の語であつたが、その後は九六年一八件、〇一年一〇件、〇六年一三件と、減少傾向にある。一方、第三位の「ヒロイン」は、上位二つの語に比べ、総使用件数ははるかに少なく、九一年まではほとんど使われていなかったが、九

六年に一六件、〇一年に一〇件、〇六年に一七件と、近年になって増加傾向がみられる。

第四位と第五位の「(元) 従軍慰安婦」と「(元) 慰安婦」は、先述のように政治問題化した九六年と〇六年に目立ち、両者を合わせると三二件と二九件の合計七〇件で、「ヒロイン」を上回ることになる。

「おかみ・おかみさん・女将」「助産婦」をはじめ、六位以下の語の多くは、年によって「出たり入ったり」して、確たる傾向はつかみにくい。

(2) 「サラリーマン」は減少し「OB」は根強い

同様に、表9で男性の性を含み込んだ職業語を具体的にみてみると、全四回分を合計して延べ語数が一位となった「サラリーマン」は、九一年三九件、九六年七七件、〇一年四三件、〇六年二八件と、九六年をピークに減ずる傾向をみせている。九六年に多かったのは、衆議院議員総選挙にあたって、繁華街で会社員にインタビューする記事や街ゆく会社員を描写する記事が多かったためである。このことばは、勤め人の男性をさすほかに、「給与生活者」一般の意味で用いられることも多々あり、そこには勤め人の女性も当然含まれているわけだが、「マン」という接尾語が、「ネクタイ姿の会社勤めの男性」しかイメージさせないように作用している。対して女性の「OL」は、中年以降の年代の勤め人の女性を思い浮かべづらく、また一般職、非管理職というイメージが想起される。均等法が改正・強化され、雇用・就労状況が多様化し、流動化している現在、「会社勤め」をしている女男に対する性的ステレオタイプを払拭し、あらゆる職業への女男の進出を促進していくためには、女男双方に「会社員」を使うなど、両性を含み込んだ用語法を普及していくことが必要である。

二番目に多い「OB」に関しては、九六年の大蔵官僚出身者による株の不祥事事件と、〇六年に相次いで発覚し

た官僚の天下り問題が、この数値を押し上げている。会社や官僚組織などの出身者を、「オールドボーイ」の略である「OB」を用いて表現する慣用法には、官僚における女男在籍者数のアンバランス、定年まで勤める女男数のアンバランス、管理職になる女男数のアンバランスなどが象徴されている。それらの不均衡にも、少しずつではあるが変化がみられる。その流れを加速するためにも、男性イメージが色濃く付着した「OB」にかえて、たとえば「GP（グラデュエイト・パーソン）」などといった新造語の普及をはかったり、あるいは「出身者」など、女男どちらをもあらわし得る中性的な語を用いるようにするべきだろう。

三位以下の上位語に関しては、「ヒーロー」と「ホスト」を除き、ほとんどが、「カメラマン」「スポークスマン」「証券マン」「ビジネスマン」など、「マン」を使ったことばが並び、その年によって増えたり減ったりしている。

3 性を含み込んだ職業語のカテゴリー分類による女男比較

(1) 性を含み込んだ職業語中分類にみる女男のダブルスタンダード

表10は、過去五回の調査でカウントされた性を含み込んだ職業語を、NTTコミュニケーション科学基礎研究所監修『日本語語彙体系』（岩波書店）を参考にして独自に作成した「職業語中分類」に従って二五のカテゴリーに分類したものである。個別のことばをみているだけでは把握できないいくつかの傾向が、カテゴリーにくくることによって浮かびあがってくる。

まず、「専門技術職」「愛好者」「役割」に関する職業語は、女性についてはみあたらない。一方、男性に関しては、「母性的／父性的呼び名」「役人」「性的職業」のカテゴリーに属する職業語は、一つもカウントされていない。

表10 性を含み込んだ職業語中分類と職業語例

職業中分類	女性の職業語例	男性の職業語例
医療専門技術職	看護婦、助産婦、保健婦など	看護師など
専門技術職	なし	カメラマン、オンブズマン、ソムリエなど
教師	保母など	保父など
タレント・選手	歌姫、〇〇ガール、モデル嬢など	ジャズマン、バットボーイ、ラガーマンなど
会社員	OL、生保レディー、キャリアガールなど	サラリーマン、営業マン、商社マンなど
若い女性/若い男性	ワンギャル、ギャル、コギャル、看板娘など	ラッキーボーイ、フレッシュマン、ルーキーなど
母性的/父性的呼び名	代理母、マドンナ、乳母など	なし
あるじ	おかみさん、クラブのママ、ママなど	マスターなど
貴人	姫、王女など	皇子、貴公子など
労働者	主婦パート、パートなど	車夫など
偉人	ヒロインなど	ヒーロー、英雄、スーパーマンなど
成人	淑女など	紳士、ジェントルマンなど
名人	女流など	アイディアマン、マエストロなど
愛好者	なし	スポーツマン、山男など
魔物	魔女など	狼男など
宗教者	修道女、尼など	神父、お坊さんなど
役人	女官長など	なし
農林漁業	海女など	カウボーイなど
軍人・保安職	なでしこ火消し、枯娘巡査など	若武者、ガードマン、サムライなど
使用人	家政婦、女中、侍女など	下男など
接客業	ホステス、遊女、スチュワーデス、ウェイトレスなど	ホスト、ウェーター、ボーイなど
性的職業	従軍慰安婦、娼婦、慰安婦、売春婦など	なし
役割	なし	OB、キーマン、チェアマンなど
指導者	ファーストレディーなど	殿サマ、ワンマンなど
その他	婦人、帰国子女など	キン肉マンなど

また、表10全般をみわたしてみても、新聞で使われている性を含み込んだ職業語は明らかに対称性を欠いており、女性の性を含み込んだ職業語は概して「性的」で、「ケア」や「サービス」を行うことに関連したものが多いのに対し、男性の性を含み込んだ職業語は、概して「専門的」「指導的」「軍事的」である。女男に割り当てられた表出的役割と手段的役割の違いがはっきり出ているといってもよいだろう。

表10の職業語例に戻ってみると、「〇〇母」に対して「〇〇父」、「〇〇ガール」に対して「〇〇ボーイ」、「〇〇レディー」

表11 女性の性を含み込んだ職業語中分類の推移(延べ語数の総計頻度順)

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	総計
医療専門技術職(看護婦、助産婦など)	7	43	57	82	21	210
会社員(OL、キャリアガールなど)	50	37	33	11	16	147
性的職業(慰安婦、売春婦など)	6	21	48	11	36	122
接客業(ホステス、スチュワーデスなど)	8	12	17	16	6	59
タレント・選手(歌姫、○○ガール、モデル嬢など)	3	1	16	19	6	45
偉人(ヒロインなど)	0	1	16	10	17	44
母性的呼び名(マドンナ、乳母など)	0	6	1	4	19	30
あるじ(おかみさん、ママなど)	2	8	17	7	7	41
使用人(家政婦、女中など)	5	16	9	6	0	36
教師(保母など)	5	6	8	1	2	22
貴人(姫、王女など)	0	0	13	0	0	13
宗教者(修道女、尼など)	0	3	6	1	3	13
若い女性(ギャルなど)	0	0	4	9	3	16
魔物(魔女など)	0	0	6	3	2	11
農林漁業(海女など)	1	5	4	0	1	11
指導者(ファーストレディーなど)	2	3	0	0	0	5
労働者(パートなど)	0	0	0	0	4	4
軍人・保安職(なでしこ、火消しなど)	0	0	0	0	2	2
その他(婦人など)	0	0	1	1	3	5
役人(女官長など)	0	0	1	0	0	1
成人(淑女など)	0	0	0	1	0	1
名人(女流など)	0	0	0	0	1	1
総 計	89	162	257	182	149	839

に対して「○○マン」のように、ほぼ対になる語を含んだ対称的な職業語がないわけではないが、一方で、「○○嬢」「なでしこ○○」「遊女」「慰安婦」、あるいは「カメラマン」「スポーツマン」「サムライ」のように、もう片方の性には対応した語がない職業語が多くみられる。また、同じ「店のあるじ」でも、かたや「おかみさん」「ママ」に対して、かたや「マスター」であり、また、同じ「魔物」でも「魔女」に対しては「狼男」と、対称性を欠く表現となっている。

(2) 女性の医療専門技術職は近年減少、男性の会社員も近年減少

表11と表12は、職業語中分類にみた性を含み込んだ職業語の延べ語数を、女性については八五年以降の五回分合計値、男性については九一年以降の四回分合計値の多い順に並

表12 男性の性を含み込んだ職業語中分類の推移(延べ語数の総頻度順)

	1991年	1996年	2001年	2006年	総 計
会社員(サラリーマン、営業マン、商社マンなど)	102	103	82	45	332
役割(OB、キーマン、チェアマンなど)	0	79	40	54	173
専門技術職(カメラマン、オンブズマン、ソムリエなど)	10	46	26	4	86
偉人(英雄、スーパーマンなど)	0	18	21	17	56
接客業(ホスト、ウェーター、ボーイなど)	3	22	4	0	29
軍人・保安職(若武者、ガードマン、サムライなど)	0	2	12	8	22
宗教者(神父、お坊さんなど)	0	15	0	2	17
タレント・選手(ジャズマン、バットボーイ、ラガーマンなど)	1	6	7	0	14
成人(紳士、ジェントルマンなど)	0	2	2	7	11
愛好者(スポーツマン、山男など)	1	2	8	0	11
貴人(皇子、貴公子など)	0	7	2	0	9
若い男性(ラッキーボーイ、フレッシュマンなど)	0	1	0	6	7
労働者(車夫など)	0	1	6	0	7
指導者(殿様、ワンマンなど)	0	4	0	2	6
医療専門技術職(看護師など)	0	1	3	0	4
あるじ(マスターなど)	0	1	1	1	3
名人(アイディアマン、マエストロなど)	0	1	1	1	3
魔物(狼男など)	0	0	2	0	2
教師(保父など)	0	2	0	0	2
使用人(下男など)	2	0	0	0	2
その他(キン肉マンなど)	0	1	1	0	2
農林漁業(カウボーイなど)	0	0	0	1	1
総 計	119	314	218	148	799

べ、経年比較したものである。

女性で最も多かった「医療専門技術職」は、八五年七件、九一年四三件、九六年五七件、〇一年八二件、〇六年二一件と推移し、〇一年が最多で、その後減少している。一方、男性の「医療専門技術職」は、「職業語中分類」中第一五位に位置し、九一年〇件、九六年一件、〇一年三件、〇六年〇件と、もともとほとんど紙面上にあらわれていない。

女性で次に多かったのは「会社員」関連であるが、八五年五〇件、九一年三七件、九六年三三件、〇一年一一件、〇六年一六件と、減少傾向をみせている。対する男性の方は、この語が「職業語中分類」の第一位を占めているが、九一年一〇二件、九六年一〇三件、〇一年八二件、九六年四五件と、やはり減少してきている。どうやら会

社員をあらわすジェンダーの入った職業語は、使われなくなってきたようではある。

女性で三番目に多いのは「性的職業」で、女性のみにあられ、八五年六件、九一年二件、九六年四八件、〇一年一件、〇六年三六件と、増減を繰り返している。また、「接客業」も、女性では第四位で、常時あらわれることばである。これに対して、男性の「性的職業」がみられないことは先述のとおりであるが、第五位の「接客業」も九六年に二二件みられるほかは、登場回数は少なく、またむらがある。

つづいて、男性で第二位の「役割」は、九一年を除いて数多くみられ、第三位の「専門技術職」も毎回コンスタントに登場するが、女性のそれらは、先述のように皆無である。

このように、「会社員」をあらわすジェンダーを含み込んだ語の使用は、女性男性とも全体的に減ってきているといえそうである。しかしながら、それ以外については、女性は、ケアやサービス関係および性的職業がいつの調査年でも存在し、それに対して男性は、専門的、指導的、軍事的な職業が常時存在するという傾向が、あまり変わっていない。

三 他者との関係で女性・男性があらわされることば

他者との関係であらわされることばとは、女性が男性や家族との関係で、また男性が女性や家族との関係で表現されることばのことである。たとえば、既婚女性を夫に付随する人の意味で「夫人」と呼んだり、家に付随する者として「嫁」と称したりする。一方、既婚男性は、家の主として「主人」「亭主」と呼ばれ、また、妻との関係で「夫君」と呼称される。いずれも相手、家、親などとの関係によって規定される表現であるが、男性が「主体」と

して呼称されるのに対して、女性には「客体」としての呼称が用いられる点に、女男間の質的アンバランスがみられる。

同時に、他者との関係であらわされることばには、次にみていくように、性別冠詞や性を含み込んだ職業語と同様の、いやそれ以上の女男間の量的アンバランスも存在する。

1 他者との関係で女男があらわされることばの「延べ語数」の全般的推移

(1) 女性が増減の繰り返し、男性は増加傾向

まず、他者との関係で女性があらわされることばの延べ語数は、表13の最下段に示したように、八五年は合計五七九件、九一年は二八一件、九六年は三七〇件、〇一年は二五八件、〇六年は二八七件と、増減を繰り返しながら推移している。

それに対して、他者との関係で男性があらわされることばは、表14に示したように、九一年三五件、九六年三七件、〇一年七三件、〇六年八三件と、やや増加傾向にあるものの、その使用頻度は、女性と比較して格段に少ない。

(2) 女性をあらわす語の圧倒的多数

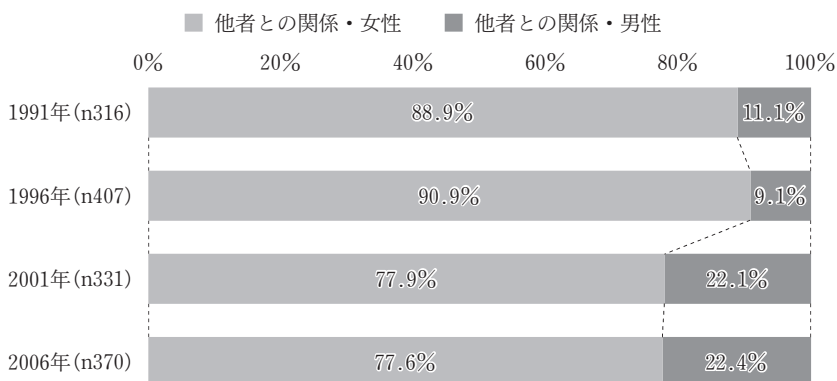
他者との関係であらわされることばの延べ語数の女男割合の推移をみたのがグラフ5である。九一年は、他者との関係で女性があらわされることばが八八・九%であったのに対し、他者との関係で男性があらわされることばは

表13 他者との関係で女性があらわされることばの各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1985年				1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	主婦・専業主婦	81	88	90	259	40	40	46	126	36	49	60	145	57	29	35	121	26	44	42	112	763
2	夫人	45	52	47	144	9	33	30	72	35	28	32	95	12	14	10	36	8	15	23	46	393
3	奥さん・奥様・奥方	14	9	5	28	4	4	4	12	9	6	2	17	4	6	3	13	6	6	5	17	87
4	嫁・お嫁さん・嫁さん・小嫁	14	5	6	25	5	2	0	7	8	9	12	29	3	3	3	9	0	4	3	7	77
5	姑・大姑・お姑さん	8	2	1	11	10	0	0	10	0	7	8	15	4	2	0	6	11	2	3	16	58
6	女房	7	7	7	21	0	8	1	9	4	10	2	16	1	1	5	7	2	1	0	3	56
7	皇后	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	11	1	22	10	11	9	30	52
8	王女	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	7	9	5	21	0	2	2	4	27
9	花嫁	4	3	6	13	3	1	1	5	2	0	0	2	0	0	0	0	0	2	2	4	24
10	とつぐ・嫁入り・嫁に行く	4	3	7	14	1	0	1	2	1	3	2	6	0	0	0	0	0	0	0	0	22
11	未亡人	1	4	6	11	1	2	5	8	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	21
12	内縁の妻・内妻・内縁の奥さん	1	6	2	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1	5	10	19
13	お嬢さん・お嬢ちゃん	1	3	4	8	1	4	0	5	2	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	0	16
14	家内	8	1	0	9	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	1	3	1	0	0	1	14
	おかみさん・カミさん・おかみ	2	1	1	4	0	0	0	0	5	0	0	5	1	0	0	1	4	0	0	4	14
16	愛妻	1	1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	2	0	4	1	5	10
17	先妻	3	0	0	3	1	2	1	4	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8
18	養女	0	0	0	0	0	0	1	1	2	1	3	6	0	0	0	0	0	0	0	0	7
	ファーストレディー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	4	7	7
20	令嬢	0	0	0	0	0	2	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	6
	姫	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	1	2	3	6
	乙女	0	0	0	0	1	0	1	2	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	6
23	人妻	0	0	0	0	1	2	0	3	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	新婦	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	1	1	1	5
	若妻	1	0	0	1	0	0	0	0	4	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	5
	後妻	2	0	1	3	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
総 計		202	188	189	579	80	103	98	281	119	119	132	370	111	80	67	258	78	105	104	287	1775

表14 他者との関係で男性があらわされることばの各紙別推移(延べ語数の上位のもの)

順位		1991年				1996年				2001年				2006年				総計
		朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	朝日	毎日	読売	計	
1	皇太子・皇太子さま	—	—	—	—	—	—	—	—	12	7	13	32	12	14	11	37	69
2	主人・ご主人	3	6	10	19	3	13	6	22	1	6	3	10	0	0	3	3	54
3	王子	—	—	—	—	—	—	—	—	8	13	0	21	6	1	7	14	35
4	亭主・ご亭主	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	2	3	5	0	8	12
5	親王・親王殿下	—	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	7	2	9	9
6	だんなさん・旦那・ダンナ	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	2	1	3	6	8
7	夫君・ご夫君	3	1	2	6	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	7
8	子息	0	0	0	0	1	2	1	4	1	1	0	2	0	0	0	0	6
9	亡夫	0	1	4	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
10	娘婿・女婿	0	0	1	1	2	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4
11	主夫	0	1	1	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	3
13	新郎	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	1	2	3
	婿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	2
	せがれ	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	御曹司	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	2
	総 計	8	9	18	35	10	18	9	37	25	30	18	73	26	29	28	83	228



グラフ 5 他者との関係であらわされることばの延べ語数の男女割合の推移

一・一％であった。同様に、九六年は女性九〇・九％に対して男性九・一％、〇一年女性七七・九％に対して男性二二・一％、〇六年は女性七七・六％に対して男性二二・四％となっている。

〇一年から、「皇太子」「親王」など男性の皇族および「王子」など男性の王族を、他者との関係で男性があらわされることばに追加してカウントしているの、それらを差し引くと、九一年は三五件、九六年は三七件、〇一年は二〇件、〇六年は二二件で、女男比はおおむね九対一となる。

また、次章で述べるが、ことばの種類（異なり語数）は、他者との関係で女性ที่あらわされることばの方が、男性のそれに比べ圧倒的に多い。女性の存在が他者に規定され、主体として表現されていない実態を、この事実から端的にみてとることができよう。

2 他者との関係で女男があらわされる具体的なことばの推移

(1) 「主婦」の歴史的役割は終わろうとしているが、表現は「夫人」とともに根強く存在

女性が他者との関係であらわされることばとして最も多く使われているのは、表13に示されているように、「主婦・専業主婦」である。八五年は二五九件、九一年は一二六件、九六年は一四五件、〇一年は一二一件、〇六年は一二件と、八五年には〇六年の二倍近くみられ、また、九六年には増え方がやや大きかったが、他の調査年には、一一〇から一二〇件でコンスタントに登場し、他のことばの頻度を数倍上回っている。

江戸時代の武家では、女性の使用人たちを使う主（あるじ）として「主婦」という語が使われたとされるが、人口構成上最も多かった第一次産業に従事する家族では、共働きが当たり前で、「専業主婦」という概念はなかった。

欧米でも事情は同様で、近代になって資本主義が発展し、職場で働く夫と家で家事・育児をする妻とが役割分掌する性別役割分業が発生し、第二次産業に従事する夫の給与で生活する妻が生まれることとなった。

日本での「主婦の誕生」は、明治期以降のことであり、一九一七年に雑誌『主婦之友』が創刊されたことに象徴されるように、大正期以降に「主婦」が大衆化してゆく。だが名実ともに女性が「専業主婦化」するのは、戦後もだいぶ経ってからの一九七〇年代に入ってからのことである。

しかしながらその後、八〇年代の終わりに共働き世帯が「専業主婦」のいる世帯の数を上回り、さらに九〇年代のはじめバブル経済の崩壊、二一世紀に入ってからのリーマンショックなど、経済危機がこの国を襲い、もはや「夫の給与」だけでは夫婦や家族が生存できない状況が出てきている。『主婦の友』が二〇〇八年に休刊したことにも象徴されているように、「主婦」という歴史的存在は、その役割を終えようとしているのではないだろうか。

にもかかわらず、無職の既婚女性のみならず、女性がひとたび結婚すれば、たとえ有職であってもひとしなみに「主婦」と呼ばれる現実ほとんど変わっておらず、「女流」冠詞のように、死語になりつつあるようには見受けられない。

「主婦・専業主婦」に次いで多いのが、「夫人」ということばである。「夫人」の単独使用、または「夫の姓名＋夫人」「夫の姓＋夫人」「夫の肩書＋夫人」を合わせて、第一位の「主婦・専業主婦」の約半分にあたる三九三件が使用されていたが、八五年以降の各調査年の出現頻度は、それぞれ一一四件、七二件、九五件、三六件、四六件と、増減しながら推移している。このように、「夫人」の出現頻度には凸凹があるが、これは、政治家や著名人である夫のメディアへの露出度に影響を受けやすいためでもあり、このこと自体が、「夫に付随」し、「夫の状況に左右」される妻の位置をあらわしているといえるかもしれない。

以下、「奥さん（奥様・奥方）」と「嫁」が三位と四位で続くが、これらも夫や家との関係で女性が位置づけられやすいことを示唆する用語である。ただし、出現頻度は、両者とも「主婦・専業主婦」の十分の一前後であり、横ばいしないしは減少傾向にあるように見受けられる。

(2) 「主人」ということばは減少傾向

一方、他者との関係で男性をあらわすことばの延べ語数は、表14にみるように、皇族や王室の「嫡男」を意味する「皇太子」や「王子」などを除いて、「主人・ご主人」「亭主・ご亭主」「だんなさん・旦那」などが上位にのびている。「主人」は、九一年の初回調査一九件、九六年二二件、〇一年一〇件、〇六年三件と、だんだん減ってきているようである。その一方で、「亭主」は、九一年二件、九六年〇件、〇一年二件、〇六年八件、また、「だんなさん・旦那」は、九一年〇件、九六年一件、〇一年一件、〇六年六件と、総計では「主人・ご主人」にはるかに及ばないものの、近年になって使用頻度が増加傾向にあるようにもみえる。

この三つのことばには、奉公人や使用人などが雇用主や家主を、また客が家主を呼ぶ時の用語として使われているものが転じて、妻が夫に使うようになった経緯からも、夫と妻の主従関係が暗示されている。中でも使用頻度の最も高い「主人」ということばを、メディアの中の性差別を考える会は、『きつと変えられる性差別語』（三省堂）の中で、最も使われたくないことばであると指摘している。

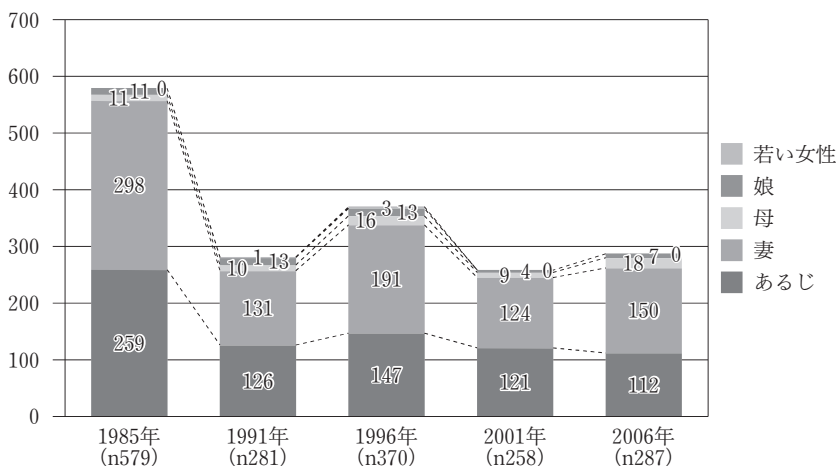
以下、「夫君」「子息」「亡夫」「娘婿・女婿」「婿」など、妻との関係、家との関係で男性があらわされる語が続くが、いずれも使用頻度は少なく、近年ではほとんど使われなくなっている。

3 他者との関係であらわされることばのカテゴリー分類による女男比較

(1) 女性は「あるじ」「妻」が増減、男性の「あるじ」は減少か
他者との関係で性別があらわされることばを、いくつかのカテゴリーにくくって分類してみると、女性は、「あるじ」「主婦」など、「妻」(「夫人」「奥さん」「女房」など)、「母」(「姑」など)、「娘」(「お嬢さん」「養女」など)、「若い女性」(「小娘」など)五種類の、男性は、「あるじ」(「主人」「亭主」など)、「夫」(「亡夫」「夫君」など)、「父」(「ヤンパパ」)、「息子」(「皇太子」「子息」など)四種類(「若い男性」は皆無)のカテゴリーに分類することができた。

グラフ6は、他者との関係で女性があらわされることばを分類し、経年比較したものである。「主婦」の多さを反映して、「あるじ」が四割前後で、「夫人」「奥さん」などの多さに影響されて、「妻」が五割前後で推移している。また、「娘」を意味する語が若干増えているように観察されるが、大きな変化ではない。

グラフ7から、男性をあらわす語をみると、〇一年「皇太



グラフ6 他者との関係で女性があらわされる語のカテゴリーの推移(単位:件)

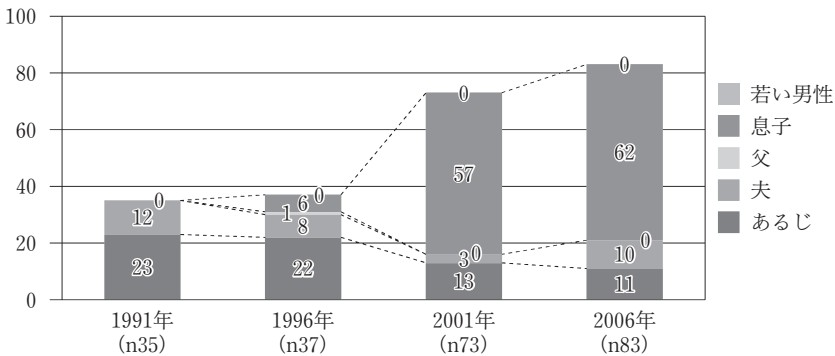
子」「王子」「親王」などを追加したせいで、同年から「息子」が増えている。しかしながら、それら皇族・王族関係を除くと、「あるじ」が五割から六割強、「夫」が二割前後から四割強という推移となる。すなわち、男性の方が女性よりも「あるじ」の比率が高く、一方、「妻」をあらわす語の方が「夫」をあらわす語よりも比率が高い、という傾向がみられるのである。

II 「異なり語数」にみる新聞ジェンダー表現二〇年の推移

「はじめに」でも述べたように、これまで本研究では、おもに「延べ語数」に焦点を当てて分析してきたが、II では、今回新たに、五回の調査を通じて算出された「異なり語数」について検討を加えてみたい。

延べ語数は、その時どきの記事内容に敏感に反応して増減する指標として価値があり、一方、異なり語数は、記事内容から比較的独立した傾向性をみるために有用である。また、延べ語数と異なり語数の比をみることで、ジェンダーを表示する語彙の「多様性」を知ることができる。

さらにIIでは、異なり語数を用いた応用的な指標として、IDF (inverse document frequency = 逆出現頻度) を用いることも試みた。IDF と



グラフ 1 他者との関係で男性があらわされる語のカテゴリーの推移(単位: 件)

表15 “女”がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
女	延べ語数	180	139	135	117	278	849
	異なり語数	25	18	20	17	18	54
	タイプ・トークン比	0.14	0.13	0.15	0.15	0.06	0.06

は、ある語がテキストの中で、どの程度ありふれた、あるいは特異な語であることを示す指標である。この指標を経年比較に用いる場合には、語が年々変わらず使われているのか、それともある年だけに突発的に使われたのが示される。いいかえると、ある言語表現がどの程度恒常的・継続的なのか、または臨時的・散発的なのかを示す数値ということになる。IDFの具体的な値を、本研究に即して述べると、各調査期間のすべてに表現があらわれた場合は一・〇となり、表現が特定の年にしかあらわれないほどより大きな数値となっていく指標である⁽⁸⁾。

一 性別冠詞

1 “女”冠詞、“男”冠詞の「異なり語数」の推移

(1) “女”冠詞の異なり語数はほぼ一定

“女”がかんむりにつくことばの延べ語数と異なり語数を集計し、経年表示したのが表15である。異なり語数(タイプ)を延べ語数(トークン)で割った値は「タイプ・トークン比」と呼ばれ、語彙の多様性の指標として用いられる。この値が低いと、少種類の語が反復して(集中して)用いられる傾向をあらわし、逆にこの値が高いと多種類の語が拡散して用いられる傾向をあらわす。したがって、ある事件・事故の影響で特定の語が集中的に用いられると、この比率は下がる。表15の最下欄に示した“女”冠詞のタイプ・トークン比は、〇一年まではほぼ一定であっ

表16 全5回の調査であられた“女”
冠詞の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	37	68.5
2	6	11.1
3	1	1.9
4	4	7.4
5	6	11.1
合 計	54	100.0

たが、○六年に急減しているのは、そのようなケースである。

これまでの全五回の調査で、“女”がかんむりにつく語が何回登場したかを集計した度数分布表が表16であるが、一回しか使われていない“女”冠詞が七割近くを占めている。このことから、“女”がかんむりにつく表現は、固定的なものというよりは、むしろ常に「生成」されるものであるということが示唆される。その意味でも、「女児」とか「女医」といった個々のことばを、いわゆる“禁句”としてリスト化するよりも、「女性冠詞」「男性冠詞」ないし「性別冠詞」というネーミングでくくり、その問題点を摘出していくことの方が、妥当かつ有効な方法であるといえよう。一方で、五回の調査年すべてで出現している“常連語”が一割ほどあり、四回出現した語も七

%あるということにも、注意を向ける必要があるだろう。

ついで、各“女”冠詞つき表現が、五回の調査の中でどの程度継続的に使われたかをみる指標として、IDFを算出した。IDF値が一・〇となるもの、つまり全ての調査年で使われている語は、付表1にみるように、「女優」「女児」「女王」「女医」「女帝」そして「女神」であった。一・三二とそれに次ぐIDF値を示したのは「女生徒」と「女学生」「女主人」「女主人公」である。これらの多くは経年とともに減少傾向にあったものの、「女学生」については○六年に急増し、「女神」も○六年に増えている。それ以外の語に関しては、使用頻度からみても、IDFからみても恒常性は低い。

表17 読みが「ジョ」の場合

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	152	113	116	98	255	734
異なり語数	10	8	10	6	6	10
タイプ・トークン比	0.07	0.07	0.09	0.06	0.02	0.01

表18 読みが「オンナ」の場合

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	24	18	17	13	13	85
異なり語数	14	9	9	10	11	43
タイプ・トークン比	0.58	0.50	0.53	0.77	0.85	0.49

(2) ♀♀ 冠詞の読み方別にみた傾向

「女」がかんわりとしてつくことばは、「ジョ」「オンナ」「メ」という読みで下位分類することができる。そこで、読み方別に分けて、分析を試みよう。

まず、表17で、読みが「ジョ」の場合についてみると、延べ語数は前述のように増減がみられるが、異なり語数は単調に減少している。⁽⁹⁾「女(ジョ)」というかんわりがつくことばの語の種類は、後にみる「女子」「女性」がつく冠詞表現に比べて少なく、語の「繁殖力」は弱いとみられるが、一部の固定化した表現は、「常連」となつて紙面に定着しているとみられる。「ジョ」は種類は少ないとはいえ、「女児」にみられるように、できごとによっては爆発的に使用を増やす場合があり、紙面上で過剰にならないよう、チェックが必要であるといえる。

表18で、読みが「オンナ」の場合についてみると、異なり語数は一〇前後で推移している。ただし、五回の調査を通してみると、四三種類の異なり語を作り出しており、反復されることのない臨時一語を作り出す種類の表現であるといえるだろう。「臨時一語」とは、独立して用いられる二つ以上の単語が一時的に一つの単語となった語のことである。またタイプ・トークン比でみると、すべての調査年で〇・五以上であり、特に〇一年と〇六年では比率が非常に高く、色いろな「オンナ〇〇」が使われていることがわかる。

その他として「メ」と読むことばがあるが(表19)、用例は「女神」のみであ

表19 読みが「メ」の場合

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	4	8	2	6	10	30
異なり語数	1	1	1	1	1	1
タイプ・トークン比	0.25	0.13	0.50	0.17	0.10	0.03

表20 “男” がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
男	延べ語数	4	13	15	12	69	113
	異なり語数	4	4	3	4	5	9
	タイプ・トークン比	1.00	0.31	0.20	0.33	0.07	0.08

表21 全 5 回の調査であらわれた“男”冠詞の出現回数（異なり語数）の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	5	62.5
2	1	12.5
3	—	—
4	2	25.0
5	—	—
合 計	8	100.0

った。読みが「メ」のことばはこの一種類しかないものの、IDFは一・〇で毎回登場していることから、女性冠詞の表現として定着していると思われる。

以上でみてきたように、冠詞表現は、表記のみならず読み注目することにより、造語傾向の差異をより細かくみることが可能である。漢語・和語という語種の違いに注目すれば、漢語の「ジョ」が延べ語数では圧倒的に多いが、異なり語数からいうと和語の「オンナ」は意外に多く、「ジョ」を若干上回っていることがわかる。

(3) “男”冠詞の異なり語数は“女”冠詞よりはるかに少ない

次に、“男”がかんむりにつく表現についてみていきたい。

表20にみるように、延べ語数は〇六年に急増している。これはI部でも述べたように事故・事件により「男児」が六三件もあつたためであり、異なり語数に関しては三から五種類と、少ない数値で推移している。また、表21にみるように、一回しか使われていないことばが六割を占めている。

IDFが低いものは、「男児」と「男優」で、一・三二であった。これらのことばは、全五回の調査期間を通して安定して使われている。この二つは「ダン」という漢語系の男性冠詞によってつくられている。これら以外は、使用頻度もまたIDFからみた恒常性ともに低く、その内訳には「ダン」のほか、「男友達」のように「オトコ」という読みもみられる。

「女」がかんむりとしてつくことばと「男」がかんむりにつくことばを比べると、どの年でも前者の方がはるかに多くの異なり語数をもっており、全体で見ると、「女」は五四種類もあるのに対して「男」は九種類にとどまっている。

一方で、出現回数やタイプ・トークン比で見ると、「女」「男」両者ともに臨時一語をつくる力がみられ、ともに造語成分としての力を持っていることがわかる。ただし、女男で比較すると、タイプ・トークン比は常に男性の方が高く、数値上は多様であるようにみえる。だがこれは、そもそも延べ語数が、女性の方に圧倒的に多いため、少ない延べ語数と異なり語数である。「男」の方が造語力は高いとはいえない。しかし、すでに固定化した語であっても、事件や事故などでできごとに応じて急に多用されることがあり、全く使われなくなることば、つまり廃語となる見込みは薄い。

2 「女子」冠詞、「男子」冠詞の「異なり語数」の推移

(1) 「女子」冠詞の異なり語数は減ったがしつこく使われ続けている

「女子」がかんむりにつくことば延べ語数の推移は、変動があるため増減傾向ははっきりしないが、〇六年には

表22 “女子” がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
女 子	延べ語数	95	42	105	81	149	487
	異なり語数	24	15	13	14	17	44
	タイプ・トークン比	0.25	0.36	0.12	0.17	0.11	0.09

表23 全 5 回の調査であらわれた“女子”冠詞の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	26	59.1
2	9	20.5
3	2	4.5
4	2	4.5
5	5	11.4
合 計	44	100.0

いることも見落としてはならない。

常連となっている語は何かをみるために IDF を指標として用いると、IDF が最も小さい、つまり恒常的にみられる“女子”冠詞のつく語は、「女子高生」「女子生徒」「女子学生」「女子大生」⁽¹⁰⁾「女子高校生」の一・〇と「女子中学生」「女子児童」の一・三二であった。これは、学校で教育を受けている者の名称である。IDF がそれに次ぐのは、「女子社員」「女子選手」の一・七四である。ただし、「女子社員」は、〇一年以降は、使われていない。これは、「女性社員」という呼び方に置き換えられたと考えられる。「女子」は非成人、「女性」は成人という分化が進んでいる可能性も考えられるが、そうだとすると、女性にかんむりをつけて徴づけ(マーク)する表現は、減るどころか、より構造化が進んでいるということになる。

急増している。一方、表22にみるように、異なり語数は安定しており、九一年に一五に減ったのち、その前後の値で推移している。そのことから、比較的少種類の語が繰り返し使われる傾向を見て取ることができだろう。タイプ・トークン比は全般的に低めである。全五回の出現回数の分布をみたものが表23である。調査年をまたがって何度も使われることは少なく、三回以上のものは二〇%程度でしかない。そして、一度しかあらわれていない語が約六割を占めていた。つまり、臨時一語として、単発的にあらわれるものが多いということである。その一方で、常連となった語が一割を占めて

表24 “男子”がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
男 子	延べ語数	14	12	27	21	93	167
	異なり語数	7	3	9	7	8	18
	タイプ・トークン比	0.50	0.25	0.33	0.33	0.09	0.11

表25 全5回の調査であらわれた“男子”冠詞の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	11	61.1
2	3	16.7
3	1	5.6
4	1	5.6
5	2	11.1
合 計	18	100.0

(2) “男子”冠詞の異なり語数は“女子”冠詞よりも少ない

“男子”がかんむりにつくことばの延べ語数は、表24にみるように、〇六年に急激に増えているものの、異なり語数では、九一年が三件と少なかったことを除けば、七〜九種類で推移していた。“女子”がつくことばに比べて、タイプ・トークン比は、〇六年を例外として、やや高いが、大きな差ではない。

全五回の出現回数の分布は、表25のとおりである。一回のみあらわれた語が六割程度で、それ以上は漸減傾向にあるが、常連の語が一・一％である。

経年的によく使用されたことを示すIDFが小さい語をあげると、「男子生徒」「男子学生」が一・〇、「男子高校生」が一・三二、「男子大学生」が一・七四であった。また、「男子児童」「男子中学生」「男子高校生」も二・三二と比較的小さく、安定的に紙面にあらわれていることがわかる。これらは全て学校で教育を受けている者の名称であり、これは「女子」の場合と同様である。

“女子”冠詞と“男子”冠詞を比べると、延べ語数、異なり語数ともに前者のほうが優勢であり、全体でみると“女子”は四八七件、四四種類あるのに対し、“男子”は一六七件、一八種類にとどまっている。これは、これまで指摘してきたように、性別による扱いの違いを反映しているということであろう。

ただ、学校で教育を受けている者を指すことが多いという点で

表26 “女性” がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
女 性	延べ語数	100	137	180	187	169	773
	異なり語数	65	74	73	76	81	246
	タイプ・トークン比	0.65	0.54	0.41	0.41	0.48	0.32

表27 全 5 回の調査であらわれた“女性”冠詞の出現回数（異なり語数）の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	176	71.5
2	40	16.3
3	14	5.7
4	9	3.7
5	7	2.8
合 計	246	100.0

は、「女子」「男子」は共通している。「女子生徒」と「男子生徒」のように、意味的に対となる形で表現が生成され、維持されているとみられる。

3 “女性”冠詞、“男性”冠詞の「異なり語数」の推移

(1) “女性”冠詞は多様性に富む

“女性” がかんむりにつく語の経年変化を示したのが表26である。“女性”冠詞は、延べ語数・異なり語数ともに多い。またタイプ・トークン比も高めであり、八五年に〇・六五だったものがその後、〇一年にかけて減少していったものの、〇六年にはやや増加した。他の女性冠詞と比較すると、“女性” がかんむりにつくことは他のどれよりもタイプ・トークン比が高く、最も高い造語力をもった表現形式であることがわかる。

表27に示した出現回数別の分布をみると、登場頻度が一回のものから五回のものまで、単調に減少している。臨時一語が大部分（七割以上）であり、五回の調査年のうち三度以上あらわれた語を合わせても、一二％程度である。この点で、“常連語”が一割みられた“女”“女子”とはやや異なっている。これは、本研究で前回報告したことを裏付ける結果である。¹⁾

経年的によく使用されたことを示すIDFが小さい語は、「女性記者」「女性作家」「女性職

表28 “男性”がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
男 性	延べ語数	5	23	38	83	125	274
	異なり語数	5	18	22	29	50	94
	タイプ・トークン比	1.00	0.78	0.58	0.35	0.40	0.34

表29 全5回の調査であらわれた“男性”冠詞の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	75	79.8
2	11	11.7
3	5	5.3
4	3	3.2
5		
合 計	94	100.0

員」「女性歌手」「女性客」「女性教師」「女性経営者」で一・〇、「女性会社員」「女性社員」「女性監督」「女性従業員」「女性スタッフ」「女性患者」「女性研究者」「女性アナウンサー」「女性編集者」が一・三二であった。社会人や専門的な技能をもったものが多く、また、メディア関係者の割合が比較的高いという傾向がみられる。

“女性”というかんむりをつけて性別を示す表現は、先にみたように異なり語数が多いことから、語の“繁殖力”が強く、多数の語を作り出す傾向が強いと考えられる。このようなケースでは、たとえば表現ガイドラインをつくるなどの際に、右に具体的にあげたようなIDFの小さい語を「注意すべき語」とするだけでは足りず、そこからすり抜けてしまう臨時一語にも注意を払う必要がある。

(2) “男性”冠詞の異なり語数は増加傾向

“男性”がかんむりにつくことばについてみると、表28に示したように、延べ語数、異なり語数ともに年を追うごとに単純に増加している。タイプ・トークン比でも、全体で〇・三四と比較的語彙が“豊富”である。

全五回合計で“男性”冠詞が何回あらわれたかをみたのが表29である。ほぼ八割が一度しか用いられておらず、臨時一語が多いとみられる。

各調査年を通してよく使用されたことを示す I D F が小さい語を挙げると、「男性会社社員」「男性教諭」「男性社員」「一・三二」、「男性職員」「男性患者」「男性教師」「男性従業員」「男性記者」一・七四となる（このうち、「男性会社社員」と「男性社員」、また「男性教諭」と「男性教師」は、同義語とみられる）。これらは、冠詞つき表現として常用されていることばと判断してよいであろう。

「女性」がつくことばを「男性」がつくことばと比較すると、成人の社会人を示すという点では対称性があるが、語の種類も使用頻度も「女性」の方がはるかに多い。全体で見ると「女性」は七三件、二四六種類にのぼったのに対して「男性」は二七四件、九四種類ではない。意味的な対称性という点では、教師についてみると、「女性」「男性」冠詞つき表現がともに同じくらいの頻度であらわれているが、一方、メディア関係者についてみると、「女性」冠詞つき表現が「男性」冠詞つき表現に比べて多く使用されている。これは、報道関係者に男性が暗黙裡に想定されている、つまり「男性標準」により、男性に冠詞つき表現を使用しないためと解釈できる。

4 「女流」冠詞の「異なり語数」の推移と性別冠詞の「異なり語数」の推移に関する全体的傾向

(1) 「女流」冠詞は着実に減少

「女流」は、表 30 にみるように、延べ語数、異なり語数ともに、着実に減少してきている。

経年的によく使用されたことを示す I D F が比較的小さいものは、「女流作家」と「女流棋士」の一・七四であるが、それでさえも減少傾向が明白である。これらは廃語に向かっていると考えられる。

表30 “女流”がかんむりにつく語の推移

かんむりとなる要素	調査年	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
女 流	延べ語数	24	19	10	5	5	63
	異なり語数	12	6	5	4	4	24
	タイプ・トークン比	0.50	0.32	0.50	0.80	0.80	0.38

表31 女性の性を含み込んだ職業語の推移

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	89	162	257	182	149	839
異なり語数	24	31	48	44	45	192
タイプ・トークン比	0.27	0.19	0.19	0.24	0.30	0.23

(2) 四種類の女性冠詞・男性冠詞を比較して

調査期間全体のタイプ・トークン比をみると、「女性」「男性」冠詞がともに○・三程度でもっとも高く、次いで「女子」「男子」冠詞が○・一程度、「女」「男」冠詞は、○・〇七前後となっている。このような結果から、ことばの生産力は、「女性」「男性」をかんむりにつける方法が、最も旺盛であるといえる。

また、こうして全体でみると、性別冠詞の種類は、比率的には女男の差が意外に少ないことがわかる。冠詞の種類別に何らかの一貫した傾向があるのだとすれば興味深い。

二 性を含み込んだ職業語

1 女性の性を含み込んだ職業語の「異なり語数」の推移

(1) 女性の職業語は異なり語数が多い

女性の性を含み込んだ職業語の異なり語数は、表31に示したように、八五年から九六年までは増加し、四八種類となったが、その後はほとんど変化していない。タイプ・トークン比では、九一年から〇六年にかけて増加傾向がみら

表32 全5回の調査であらわれた女性の性を含み込んだ職業語の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	79	66.9
2	18	15.3
3	12	10.2
4	4	3.4
5	5	4.2
合 計	118	100.0

れ、延べ語数と考え合わせれば、相対的に異なり語数が増えており、いわば「少ロット多品種生産型」といえる。

全5回の調査で、各職業語が何回出現したかを、表32に示した。

まず、一回しかあらわれなかったものが、約七割であった。また、それ以上の出現回数の語は漸減してゆき、全回にわたって出現したものは四％程度にとどまっている。

一回しか出現しなかった語は、職業語の場合、冠詞表現とは異なり、そのつどかんわりをつける形で生成されたものではない。臨時一語としてあらわれそのまま消えていったものや、調査期間中の短期間に死語・廃語となった語や、もともと新聞で使われる機会が少ない語などが含まれていると考えられる。したがって、たとえば性を含み込んだ職業語についての表現ガイドラインをつくるような場合には、工夫が必要かもしれない。ごく低頻度ながらたまにあらわれる語の扱いは、潜在的な職業表現のレパートリーの拡がりをみると全てをリストアップすることは難しく、やっかいである。恒常的にあらわれる語を例示しつつ、「ジェンダーを含み込んだ職業語」というとらえ方に注意をうながすことが有効ではないかと思われる。

これらの中で、経年的にみて恒常的に出現しているものを、IDFを指標としてあげると、「看護婦」「OL」「娼婦」「保姆」「キャリアウーマン」がおのおの一・〇であり、それに次ぐものは「ヒロイン」「ホステス」「家政婦」「遊女」で一・三二であった。

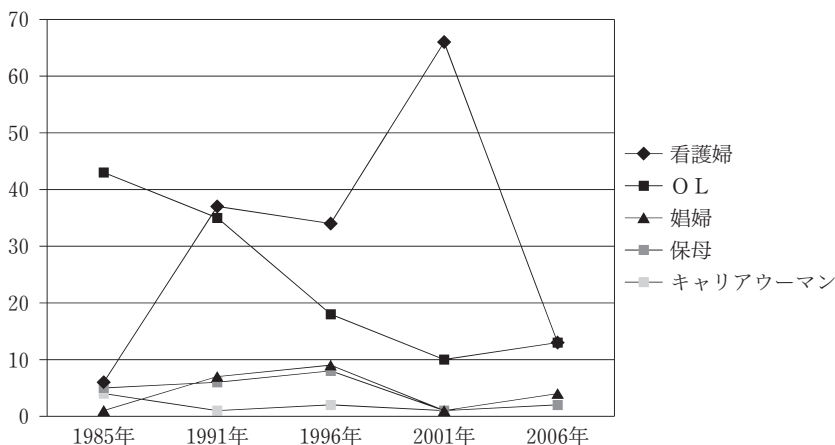
女性の性を含み込んだ職業をあらわすことばのうち、「常連」の語の経年変化をあらわしたのがグラフ8である。

これを見ると、「OL」はほぼ直線的に減少している。一方、「看護婦」は〇一年まで増加傾向にあったが、〇六年には激減していることがわかる。

(2) 「看護婦」から「看護師」へ

そこで、「看護師」の名称について、別途、新聞データベースを用いて経年変化を調べてみた(表33)。ここでは朝日・毎日・読売の見出しにあらわれた、本研究の調査年と同じ年における「看護婦」「看護師」「看護師」の年間登場頻度を求めた(ただし、八五年については朝日新聞しかデータベース化されていないので、他紙は表から省いた)。その結果、三紙ともに、「看護婦」は〇一年まで増加傾向を示していたものが、〇六年に急減していることが明らかになった。また、「看護士」は、男性であることを表示するために使われていた(〇一年に突然増えているが、これは「筋弛緩剤事件」の反映である)。

これらに代わり、「看護師」は〇六年に急増し、それまでの「看護婦」の語数とほぼ同じ分量となっていることから、この間に用語の入れ替えが進んだことがわかる。これは、「看護婦」「看護士」が



グラフ8 女性の性を含み込んだ職業語の延べ語数の推移(単位:件)

表33 各紙データベースによる「看護婦」「看護師」の呼び方の推移(各年1/1～12/31)

紙 名	呼 称	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年
朝 日	看護婦	228	409	428	516	17
	看護師	0	1	0	5	484
	看護士	9	10	10	87	1
毎 日	看護婦	—	628	695	726	34
	看護師	—	0	1	8	758
	看護士	—	31	19	103	0
読 売	看護婦	—	279	320	355	18
	看護師	—	0	1	4	345
	看護士	—	4	10	99	0

注： 1985年については毎日・読売ではデータベースの収録範囲外であった

二〇〇二年三月から性別を含まない「看護師」に、法律上名称変更されたことを反映している。ただし、「看護婦」「看護士」という性別を示す名称が、〇六年時点でも各紙ともに三%から五%ほど残存している。

ここからいえることは、女性であることを示す「看護婦」(男性であることを示す「看護士」ということ)が、「看護師」というジェンダー中立的な職業語としてある程度定着するのに、法律の効果があつたということである。法律がなければ古いことばは従前通りの「慣性」で使われ続けたと思われ、法律はそれにブレーキをかける力があつたといえよう。ただし法律は、古いことばを完全に一掃するわけではなく、それこそ「慣性」のように、その後も若干使われ続けていることがわかる。

(3) 語末は「〇婦」のような漢語から「〇ガール」のような外来語へ

五回の調査をとおしてあらわれた女性の性を含み込んだ職業語全ての異なり語数について、語末の構成要素の出現比率をグラフ9に示した。最上位から順に「婦」「女」「嬢」となっており、これらは漢語である。次いで一〇%以下で五%以上のものをあげると、「ガール」「ママ」「ギャル」「母」「レディー」であった。

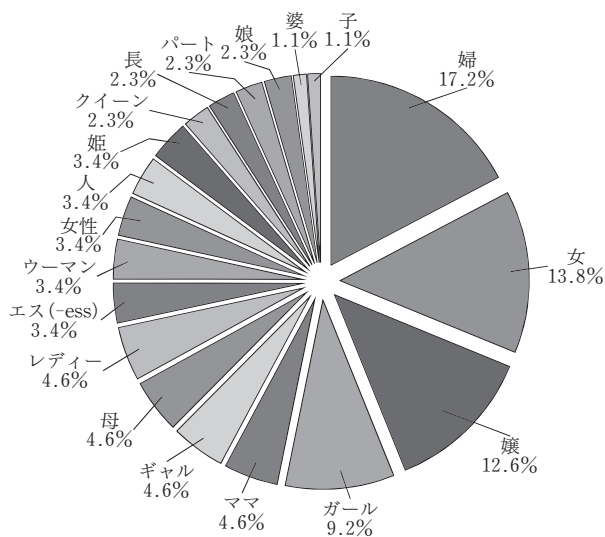
さらに、女性の性を含み込んだ職業語を語末のタイプ別にみると、漢語が八

タイプ五一種類(五八%)、外来語が九タイプ二三種類(三六%)、和語が二タイプ五種類(六%)であった。

漢語の多さは、女性の職業についての因習の長い歴史を考えると、うなずけるものがある。一般的に漢語は、和語や外来語に比べて造語力が強いことが国語学では定説になっており、職業語についてのその造語力の高さの影響力は多大であると考えられる。

次に、各語末構成要素の経年変化を表34に示した。延べ語数が最多の「婦」は、九六年をピークに漸減傾向がみられ、異なり語数も同様の傾向を示している。「女」も、増減パターンが類似している。「嬢」は、減少傾向が九一年からと、それより早く急減している。

一方、「ガール」「ギャル」「ママ」は、調査開始時点の八五年には使われていなかったものが、九一年あるいは九六年から使われはじめ、その後使用頻度を増やしてきた比較的新しい造語法である。細かくみれば例外はあるものの、漢字を使った造語から外来語を使う造語の形態へ、という流れをみてとることも可能であろう。



グラフ9 全5回分の女性の性を含み込んだ職業語の語末構成要素の比率(語末の種類数)

表34 女性の性を含み込んだ職業語の語末構成要素の推移

構成要素	語末の延べ数						語末の種類数					
	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
ウーマン	4	2	3	1	2	12	1	2	2	1	1	3
エス(-ess)	6	1	12	14	3	36	2	1	3	2	1	3
ガール	0	2	5	6	3	16	0	1	2	3	3	8
ギャル	0	0	4	9	1	14	0	0	2	3	1	4
クイーン	0	0	2	0	0	2	0	0	2	0	0	2
さん	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	3	3
パート	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	2	2
ママ	0	0	2	4	2	8	0	0	1	1	2	4
レディー	2	3	15	1	0	21	1	1	2	1	0	4
女	1	21	26	6	7	61	1	6	8	4	3	12
女性	1	0	0	1	1	3	1	0	0	1	1	3
嬢	10	1	5	1	0	17	8	1	2	1	0	11
人	0	0	1	0	3	4	0	0	1	0	2	3
長	0	0	2	1	1	4	0	0	2	1	1	2
婆	0	0	1	1	0	2	0	0	1	1	0	1
姫	0	0	10	5	2	17	0	0	2	2	1	3
婦	13	61	105	92	52	323	5	7	9	7	7	15
母	7	13	8	2	18	48	2	3	1	2	4	4
娘	0	0	0	2	2	4	0	0	0	2	1	2

注：異なり語数の総計は、各年度の加算ではなく、調査期間全部での異なり数を示す

2 男性の性を含み込んだ職業語の「異なり語数」の推移

(1) 男性の性を含み込んだ職業語の異なり語数は増加後やや落ちつきをみせる

表35にみるように、男性の性を含む職業語の異なり語数は、〇一年まで増加し、五〇種類とピークを迎え、その後〇六年には減少がみられる。だがタイブ・トークン比をみると、〇一年は〇・二三、〇六年は〇・二二であり、ほぼ同一水準といっている。表36で出現回数分布をみると、一回のみ出現したことが七割、全回出現語が四％といった値や、その漸減のしかたに関しては、女性の性を含み込んだ職業語とよく類似している。

IDFが一・〇と最も少ない職業語すなわち恒常的にあらわれている語は、「サラリーマン」「カメラマン」「ビジネスマン」「商社マン」であり、これらはすべて「マン」がつく語である。主として事務労

表35 男性の性を含み込んだ職業語の推移

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	—	119	314	218	148	799
異なり語数	—	15	44	50	33	142
タイプ・トークン比	—	0.13	0.14	0.23	0.22	0.18

注： 85年にはカウントを行っていない

表36 全4回の調査であらわれた男性の性を含み込んだ職業語の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	66	69.5
2	15	15.8
3	10	10.5
4	4	4.2
5	—	—
合 計	95	100.0

注： 男性の調査期間の総計は4回分である

「カメラマン」も似たような動きを示している。一方「ビジネスマン」は微増傾向がみとめられる。以上みてきたように、男性の性を含む職業語で恒常的にあらわれているものの多数派は、外来語の「マン」が語末につくものである。これは容易に使える造語成分であるため、模倣されて性別を示す職業語を増殖させる種となり得るものである。「マン」のつく語が、「中身」や「質」として事務労働者や高度な専門技術者を連想させることによって、結果的に男性の就く職業イメージを固定化する可能性があるといわねばならない。

(2)

男性の性を含み込んだ職業語は外来語中心

グラフ10には、男性の性を含む職業語の代表的なものの延べ語数を、経年変化で示した。ここから、「サラリーマン」が使用されたピーク時は九六年であったことがわかる。また、

働に従事する者と、高度な専門技術職によって占められている。IDFがそれに次ぐものは、「OB」「スポークスマン」「ヒーロー」「ホスト」「オンブズマン」「営業マン」「英雄」「スポーツマン」「紳士」「ジャズマン」で、一・四二であった。こちらでは「マン」がつく語が五種類みられるが、それ以外の形もあらわれており、仕事の内容も事務労働以外のものとなっている。

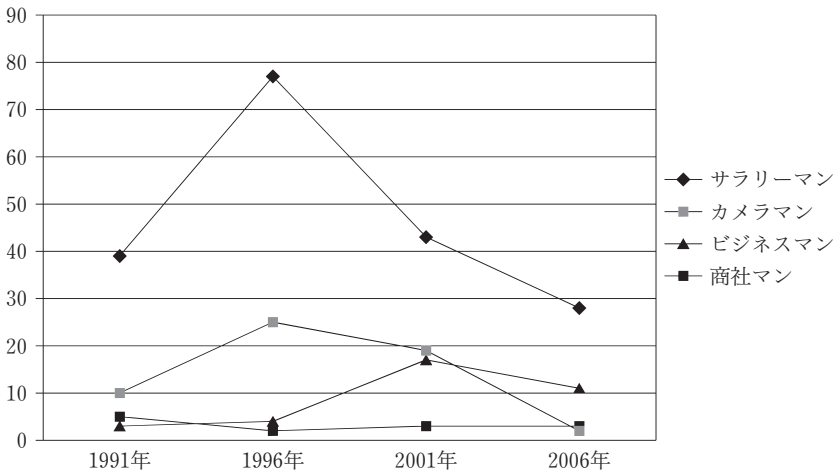
(3) 「マン」は減少傾向へ

四回の調査を通じてあらわれた、男性の性を含み込む職業語全
ての異なり語数について、語末の構成要素の出現比率をグラフ 11
に示した。「マン」が語末につくものが六〇％と圧倒的に多く、
それに次ぐのは「士」「ボーイ」の各一〇％であった。

語末のタイプ別にみると、外来語が二タイプ五五種類（七〇
％）、漢語が一〇タイプ二二種類（二六％）、和語が一タイプ三三
種類（四％）であった。外来語比率が高いという点で、漢語が六割
を占めた女性の性を含み込んだ職業語の場合とは異なっている。

次に、各語末構成要素の経年変化を表 37 に示した。延べ語数・
異なり語数ともに圧倒的多数を占める「〇〇マン」は、カウント
を始めた九一年の時点から最多であり、延べ数は九六年に一七七
件、異なり数では〇一年に二七種とピークを示したのち、その後
は大きく減少していることがわかる。

先述したように、女性の性を含み込んだ職業語において、外来
語に由来する構成要素があらわれたのは比較的新しく、かつ頻度
も少ない。それに対して「〇〇マン」はそれ以前より存在し、か
つ頻度も多い。ジェンダーを含み込んだ職業語についても、女性

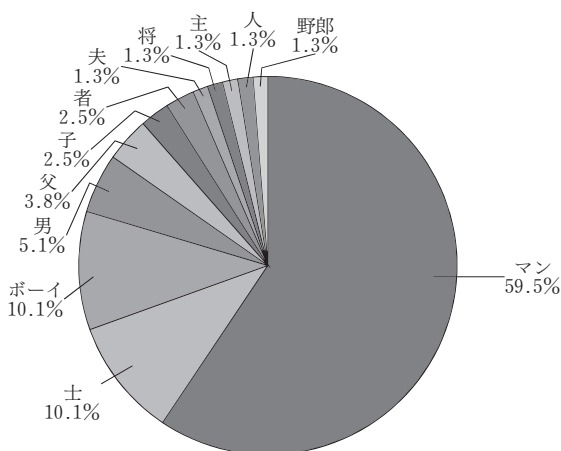


グラフ10 男性の性を含み込んだ職業語の延べ語数の推移(単位: 件)

表37 男性の性を含み込んだ職業語の語末構成要素の推移

構成要素	語末の延べ語数					語末の数				
	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
ボーイ	0	60	8	49	117	0	2	4	4	8
マン	114	177	160	64	515	13	24	27	14	47
士	0	4	9	5	18	0	3	6	2	8
子	0	7	2	0	9	0	1	1	0	2
者	0	1	0	4	5	0	1	0	2	2
主	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1
将	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1
人	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1
男	2	0	4	0	6	1	0	3	0	4
夫	0	0	6	0	6	0	0	1	0	1
父	0	17	0	2	19	0	3	0	1	3
野郎	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1

注：異なり語数の総計は、各年度の加算ではなく、調査期間全部での異なり数を示す



グラフ11 男性の性を含み込んだ職業語の語末構成要素の比率(語末の種類数)

と男性の非対称性がみられるのである。

(4) 性を含み込んだ職業語の女男比較

職業語の異なり語数総数を女男別にみると、女性一一八種類に対して、男性は九五種類とそれほど大きな差はみられない。

しかしながら、語の作られ方をみると、男性では、「マン」を含むものが九五種類中四六種とほぼ半数を占めているのに対し、女性では「婦」を含むものが一五種類（約一七％）、「女」を含むものが一二種類（約一四％）、「嬢」を含むものが一一種類（約一二％）あるだけで、あとはいろいろな語末が一〜八回使われるといった様態を示しており、多様性がある。

タイプ・トークン比をみても、各年度で女性はずねに男性を上回っており、語彙的にいつて多様性に富んでいる。つまり、職業に関しては、女性であることをあらわすジェンダー表現が、より多種多様であるということである。

表38 他者との関係で女性があらわされることばの推移

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	579	281	370	258	287	1775
異なり語数	31	26	32	26	39	100
タイプ・トークン比	0.05	0.09	0.09	0.10	0.14	0.06

表39 全5回の調査であらわれた他者との関係で女性があらわされる語の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	70	70.0
2	18	18.0
3	3	3.0
4	6	6.0
5	3	3.0
合 計	100	100.0

三 他者との関係で女性・男性があらわされることば

1 他者との関係で女性があらわされることばの「異なり語数」の推移

(1) 同じ語の反復数が多い

他者との関係で女性があらわされることばの、異なり語数についてみていこう。

表38は、過去五回の経年変化を示したものである。同表にみるように、二六種類から三九種類までの範囲でわずかに増減しているものの、あまり大きな変化はみられないことがわかる。

タイプ・トークン比をみると、全体で〇・〇六と非常に低い。これは、異なり語数に比して延べ語数が非常に多く、同じ語が繰り返して紙面にあらわれる傾向が強いことを示している。このタイプ・トークン比は、八五年に特に低く、年を経るごとに徐々に高くなってきている。

他者との関係で女性があらわされることばの出現回数別分布を示したのが表39である。まず、一度だけ出現した語が七割程度を占めている。また、二回あらわれたことばの比率は二割弱となり、それ以上の出現回数になると、さらに減少する。全ての調査であらわれた語は3%である。

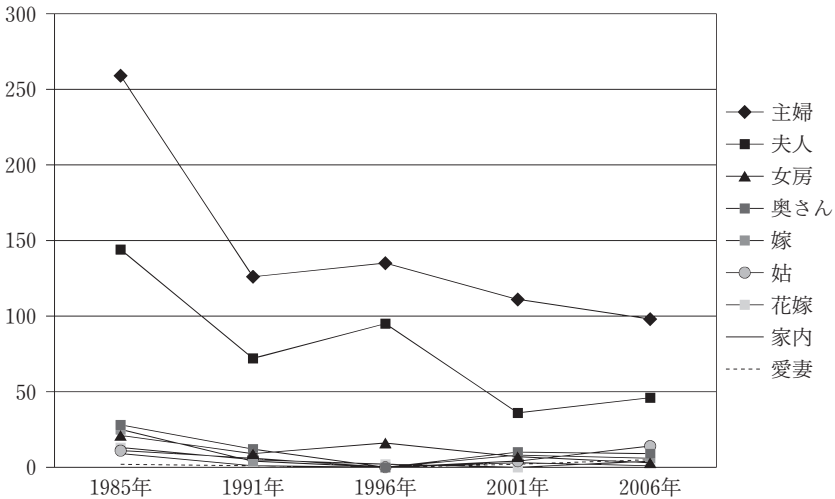
恒常的に紙面にみられる語をIDFからみると、「主婦」「夫人」

「女房」が一・〇で最も顕著である。これらはすべて妻を示すことばである。それに次ぐのが一・三二の「奥さん」「嫁」「姑」「花嫁」「家内」「愛妻」となっており、「姑」以外はやはり妻を示すことばである。「姑」がこの中に入っているのは、「嫁姑」の関係として、配偶者の母親が話題となりやすいことを反映するものと考えられる。

これらのことばは、延べ語数のデータが示す上位語とは大きく異なっている。それは、延べ語数が事件性や話題性によって急増するのに対し、この IDF によって示された語は、〃空気のように〃常時遍在している語と考えることができるからであり、その意味でジェンダー意識に与える影響力は大きいといわなければならない。

(2) 「主婦」「夫人」などは減少傾向

恒常的にみられる上記のことばの延べ語数の経年変化を示したのがグラフ 12 である。「主婦」は一九八五年から九一年にかけて急減し、その後は大きな変化がないものの、漸減傾向がみられる。「夫人」についても、八五年から九一年にかけての減



グラフ 12 他者との関係で女性があらわされることばの延べ語数の推移(単位: 件)

表40 他者との関係で男性があらわされることばの推移

	1985年	1991年	1996年	2001年	2006年	全 体
延べ語数	—	35	37	73	83	228
異なり語数	—	6	10	11	14	41
タイプ・トークン比	—	0.17	0.27	0.15	0.17	0.18

注： 85年にはカウントを行っていない

表41 全4回の調査であらわれた他者との関係で男性があらわされる語の出現回数(異なり語数)の分布

出現回数	度 数	比率(%)
1	19	67.9
2	6	21.4
3	2	7.1
4	1	3.6
5	—	—
合 計	28	100.0

注： 男性の調査期間の総計は4回である

少が大きかったが、その後は増減しつつもゆるやかな減少傾向にあるように見受けられる。それ以外のことば、つまり「女房」「奥さん」「嫁」「姑」「家内」についても、同様に八五年から九一年にかけて減少が明確にみとれる。ただし、「姑」は〇六年にゆりもどしのように増えており、また「花嫁」は〇六年が最も多くなっている。

2 他者との関係で男性があらわされることばの「異なり語数」の推移と女男比較

(1) 男性については種類は少ないがゆるやかな増加傾向

次に、男性を他者との関係であらわすことばの種類について、考察してみよう。なお、付表11では、「だんな」「ダンナ」「だんなさん」を統合し、「旦那(さん)」と表記した。まず、表40にみるように、異なり語数にはゆるやかな増加傾向がみられる。また、表41にみるように、一度だけ出現した語が女性と同じく七割程度みられ、かなり多い。

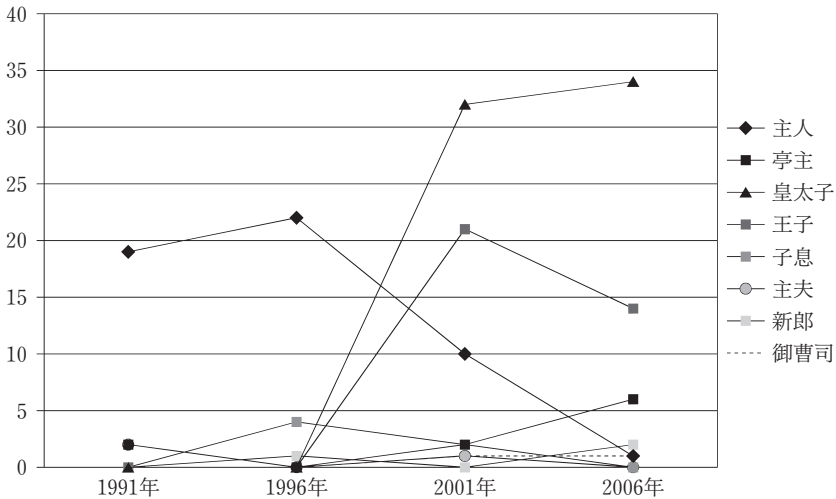
恒常的にあらわれていることばをIDFからみると、一位が一・〇の「主人」であり、「亭主」と「旦那(さん)」が一・四二でそれに次いでいる。「主人」と「亭主」は「主(あるじ)」としての「夫」を示すことばであり、「旦那」は、本来、夫や

他家の「主人」を敬つていうことばである(ただし、「ダンナ」や「だんな」という表記の場合、意味の平俗化がみられる)。次に恒常的な語は I D F 二・〇の「皇太子」「王子」「子息」「主夫」「新郎」「御曹司」があげられ、息子を示すことばと夫を示すことばが混在してあらわれている。

(2) 「主人」は近年減少しているものの変動の大きい語も

前述の「常連」となっていることばの延べ語数の経年変化をみたのが、グラフ 13 である。「主人」は九六年をピークに大きく減少してきている。新聞においては、女男間に主従の関係が入り込むこの語の使用が減ってきているといっているだろう。

しかしながら、「亭主」については、不安定な変化を示し、〇六年には若干増えている。「旦那(さん)」は、低頻度であったものが〇六年に急増した。「皇太子」は〇一年、〇六年で急増し、「王子」も同じ時期に急に増えているが、これらは先述のように過去にカウントしていなかった語であるためと、皇族や王族に関する話題が多かったことを反映している。



グラフ 13 他者との関係で男性があらわされることばの延べ語数の推移(単位: 件)

(3) 他者との関係で女性があらわされることは男性より多様かつ反復が多い

他者との関係であらわされることを総数で比較すると、延べ語数では女性が一七七五、男性が二二八で約七・九倍、異なり語数では女性一〇〇、男性二八で三・六倍と、ともに女性のほうが男性よりも大幅に多い。

タイプ・トークン比をみると、どの時点をとっても、男性のほうが女性より高いが、これは、女性は男性に比べて圧倒的に一語あたりの反復回数が多い、すなわち延べ語数が多いことの反映であると解釈できる。ただし、その比率の違いは、九六年を最大として、徐々に小さくなる傾向にある。

むすびにかえて——言語計画に向けて

序章で述べたように、言語に望ましくない傾向がみられた場合には、健全な方向に向かうように方策を考えるところ、**「言語計画」**あるいは**「言語政策」**の考え方を、ジェンダー表現についてもあてはめることができる。

D・ダウストは、言語計画とは、言語と言語使用に影響を与えることを目的とした、未来に向けた介入であり、それは、進行しつつある社会言語学的な方向を、支持あるいは抑制する意識的選択であると述べている。⁽¹³⁾ ジェンダー表現の場合に引き寄せて考えれば、単に言語使用の慣例に任せるのではなく、惰性的で因習的な表現を抑制し、ジェンダー・バイアスのない未来にむけて意識的な選択を行うことが、言語計画として考えられる。

言語計画の主体は政府である場合が多いが、社会集団や個人が中心的な役割を果たす場合もある。ジェンダー表現についても、政府のみならず、研究グループから個人にいたるさまざまなレベルで、変化のきっかけが起ころと考えられる。そのようなグループや個人の活動を促進するような仕組みをつくることも重要である。

言語改革 (language reform) は、言語に対する態度や、言語使用者の所属する社会集団が共有する規範などに依存しているが、言語変化に導く重要な要件は、言語に対する人びとの態度であると考えられている。¹⁴⁾ ジェンダー表現についても、変化の原動力となるのは、人びとがジェンダー表現に対してもつ態度である。ジェンダー・バイアスのある表現を是正するための先行条件として、まず人びとにジェンダー表現についての注意をうながし、因習的な言語的潮流に気づかせること、さらにそのような表現の問題点についてよく理解してもらうことが、そのような表現に対する言語的態度を真に変化させるために重要であろう。

また、言語計画は、言語がどうあるべきか規範を設定するという政策の立案だけではなく、それを教育などによって普及する実施的側面についても考えないと、失敗に終わりやすいことが指摘されている。単に新たな規範を立案するだけでは不十分であり、それをいかに人びとの間に普及させ、定着させてゆくかも計画するべきである。したがって、ジェンダー表現の場合でも、ガイドラインを作成してあるべき姿を明確に提示するとともに、メディアの送り手をはじめとする言語使用者に指針が周知され、実際に使用されるようにする手段を講じることが望ましい。

そして、言語計画では、実施した結果について定期的に評価を加え、当初の計画にはなかった新しい状況に適合させ、あるべき方向に向けて修正を加えることが、欠かせないプロセスである。ジェンダー表現についても、変化の方向を定期的に観測して評価を加え、修正を加えてゆくことが求められている。本研究会が定期的に行ってきた調査も、そのような活動のひとつとして位置づけることができよう。

以下では、本論のむすびとして、本調査研究から得られた結果を総括し、言語計画に向けた提言を行いたい。

一 言語計画への提言

比較的少種類の語が繰り返し使われる傾向がある場合には、用語についてのガイドラインが有効と考えられる。だが、性別冠詞「男子」「女子」を例にとると、学校の生徒や学生を主な対象として固定化して使い続けられている一方で、多数の臨時一語が作り出されているという側面も忘れてはならない。

常連となっているが繁殖力が少ない語については、語をリスト化し、注意を呼びかけるのが単純明快な方法である。だが、繁殖力が高い語については、リストからすり抜けてしまう臨時一語に特に注意を払う必要がある。この場合には、性の区別が特に必要でない場合に機械的に「女子」や「女性」というかんわりをつけるのをやめよう、というように、造語の仕方について注意を呼びかける必要がある。

また、「主婦」のようなことは、代替となる適当なことがみつからないという理由で、必要以上に使われている場合もある。いわば、語彙に構造的な欠如がある場合には、この空所を埋める努力をしなくてはならない。この「空所」に何となく気づいた人びとの間で、自発的に新語が作られる場合もあるが、一時的流行語で終わってしまうものも多いので、ここでは、言語計画的にジェンダーに敏感な視点を取り入れた語彙の育成計画を立てることも必要であろう。

野放図な女性冠詞の使い方は減ってきているのかもしれないが、一方で、女性冠詞の造語法が体系化・構造化されている可能性がある(たとえば、女性非成人には「女子○○」、成人には「女性○○」)。整然とした形式の中に、性別の徴づけの構造化ができあがってしまっている場合、それを崩すことはより難しくなろう。これは言語意識の面からみると、これらの表現が自明視されるということである。つまり、意識にのぼることが少なく、「自動化」

された反応の中で処理してしまうということであり、それは慣習の中で流されてゆくことである。それを防ぐために、これらの表現の意味を問う作業が、個々人のレベルでも、表現の送り手のレベルでも、また、政策的なレベルでも求められている。望ましい方向を見出して流れを変えてゆく意識的な努力が必要である。

たとえば、語彙の非対称性があるものは、対称化し、女性と男性に関する表現を均衡化するのも一案である。その際には、①語彙の空所となっている対称表現を造語する、②性中立的な語（言い換え表現）を造語する、③非対称的な語を（本来不要なものとして）使わないようにする、などの方法が考えられる。

「主婦」の場合にみられように、それを使わない方針③を出しても、代替として使える語がないと、古い慣習は続けられてしまうおそれがある。したがって、③を提案する場合には、別ないい方を同時に示すことで、スムーズな移行が促進されるだろう。

大多数のジェンダー表現は、現れては消えることを繰り返している語である。この場合、いわゆる「禁句集」のような形でリストをつくってカバーすることには限界がある。むしろ、造語要素に着目することが有効であろう。また、「性別冠詞」は限られた種類しかないので、リストアップし、注意を促すことも可能である。さらには「性別冠詞」という「表現法」そのものについての理解が言語使用者に得られれば、原因を根本から絶つことができるだろう。つまり、「事例ベース」ではなく、「ルールベース」に移行できることが理想である。ただし、「女生徒」「女子高生」などのように、特に目立った語は、事例として例示することが有効であろう。

性別冠詞については、女性と男性とで延べ語数、異なり語数ともに不均衡であるが、男性を示す表示は増加傾向にあり、女性・男性で平行表現化している方向ととれなくもない。ただし、それが不必要な性別強調につながっていないかをチェックする必要がある。

また、「看護師」の例にみられるように、制度を変えることは言語使用に大きな影響力をもつ。用語について明確な方針を出し、周知が図られれば、言語計画は成功する可能性が十分にあると思われる。

二 ジェンダー表現の類型

本調査研究で行ってきたように、ジェンダー表現の使用頻度と経年的推移から、グラフ14のような類型化が可能であろう。

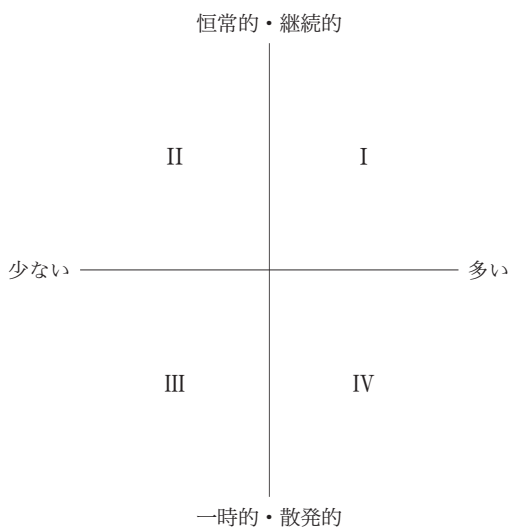
I型は、使用頻度が高く、しかも、しつこく使われ続けているものである。

II型は、使用頻度は低いが、しつこく使われ続けているものである。

III型は、使用頻度が低く、しかも、一時的あるいは散発的に使われるものである。

IV型は、使用頻度は高いが、一時的あるいは散発的に使われるものである(この他、増加・減少傾向や、バリエーションの大きさについても観察することが可能であるが、複雑になるので、ここでは割愛する)。

なお、本調査研究では、分析のレベルが、単語レベルと語の構成要素(形態素)レベルの二種類にわたっている。



グラフ14 ジェンダー表現の使用頻度と経年変化からみた類型

る。たとえば、「女子○○」のような「女性冠詞」は構成要素レベルでとらえたものであり、「女子学生」は単語レベルでとらえたものである。ガイドラインをつくる際も、どのレベルで表現をとらえるかを考慮する必要がある。そこから、以下では、グラフ 14 に示した分類に加え、構成要素による「生成型」という亜種を考えた。

I 型 a 生成型 この例として、旺盛な造語活動をみせている「女性」冠詞がある。本当にその表現が必要かどうかをチェックしてから使用するように習慣づけるしかないであろう。

このような必要性をチェックする活動は、単なる禁句リストを使うよりも高い負荷を言語使用者にかけることになるが、このような「モニター」の働きは、生成されつづけるジェンダー表現を食い止めるために、どうしても必要である。

I 型 b 固定・慣習型 たとえば「主婦」「女優」などのように、強い慣習化によつて普段からよく使われ続けているものがあげられる。これについては、固定化していることから、具体例を示すことが有効である。使わないように勧めるとともに、代替表現を例示し勧奨するとよいだろう。

II 型 たとえば「慰安婦」のように、紙面にあらわれることが少ない語でありながら、長期間しつこく居座り続けているもので、少数であれ軽視はできないことば。このような語は目立たなくとも、ある年に急に使用頻度が増えることで勢いを増し、IV 型に変化する可能性がある。また、そのようなことがなくとも、その語が語構成の範型となり、新語がつくられる可能性がある。

III 型 たとえば「女流」冠詞。死語・廃語になりつつある語か、臨時的に作られ使い捨てられた語（臨時一語）である。廃語になる方向にあるものなら放置しておいてよいだろう。臨時一語の場合は、その語を生み出した構成要素にむしろ注目するべきである。

IV型 たとえば「女兒」「男児」のように、事件などをきっかけに急激に用いられ、その時期のキーワードのようになる語である。III型と同様の対策が必要である。また、急増の後、その影響で類似表現や派生表現が発生していないかに注意するとよいであろう。

(1) 田中和子「新聞にみる構造化された性差別表現」磯村英一・福岡安則編『マスコミと差別語問題』明石書店、一九八四年、一七九～二〇一頁。

(2) 田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞紙面にあらわれたジェンダー——性差別表現の量的分析を中心に——」『国学院法学』第二八巻第一号、一九九〇年、六九～一六二頁。

田中和子・諸橋泰樹「新聞における性差別表現は変わったか」『創』一二月号、創出版、一九九四年、三二～四三頁。

田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞紙面にあらわれたジェンダー(その2)——性差別表現をめぐる一九九一年の紙面分析を中心に——」『国学院法学』第三二巻第三号、一九九四年、一七～一七九頁。

田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞は女性をどのように表現しているか——新聞紙面にあらわれたジェンダー」一九九六年調査より——『国学院法学』三六巻第一号、一九九八年、八五～一五〇頁。

田中和子「新聞とジェンダー」『女性教養』一一月号、日本女子社会教育会、一九九九年、三～六頁。

田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞において女性はどうのように表現されているか——新聞紙面にあらわれたジェンダー」『第四回調査を中心に——』『国学院法学』四三巻第四号、二〇〇六年、六九～一六二頁。

田中和子・女性と新聞メディア研究会「ミレニアムを経過した新聞ジェンダー表現の現在——新聞紙面にあらわれたジェンダー」『第五回調査を中心に——』『国学院法学』第四六巻第四号、二〇〇九年、五五～一三四頁。

(3) このほか、新聞メディアと女性に関して総合的に扱った著書として、田中和子・諸橋泰樹編著『ジェンダーからみた新聞のうら・おもて——新聞女性学入門』現代書館、一九九六年、全四〇六頁、新聞家庭面を分析したものに、田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞家庭面の女性学——性別面建ての歴史とその改廃をめぐる——」『国学院法学』第二八巻第二号、一九九〇年、一～四九頁、求人広告を分析したものに、田中和子・女性と新聞メディア研究会「新聞求人広告にみるジェンダーの現状——一九

九六年求人広告調査を中心に——『国学院法学』第三六卷第三号、一九九八年、一五七～二二三頁、田中和子ほか「改正均等法と新聞求人広告」『女性教養』二〇〇〇年四月号、三～六頁、そして田中和子・女性と新聞メディア研究会・均等法研究会作業部会「改正男女雇用機会均等法下の新聞求人広告とジェンダー」——一九九九年電話問い合わせ調査の結果を中心として——『国学院法学』第三八卷第三号、二〇〇〇年、一一七～一四九頁、および同「改正男女雇用機会均等法下の新聞求人広告とジェンダー」——一九九九年電話問い合わせ調査の結果を中心として——『国学院法学』第三八卷第三号、二〇〇一年、八五～一一五頁、また投書欄、テレビ・ラジオ面を分析したものに、田中和子・女性と新聞メディア研究会「ミレニウムを通過した新聞ジェンダー表現の現在（その2）——第五回調査データの変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、『少年』の用法の分析を中心に——」『国学院法学』第四七卷第三号、二〇〇九年、一～八三頁、などがある。

(4) 日本新聞協会が行った「2009年全国メディア接触・評価調査」によると、新聞は「社会に対する影響力がある」は五二・八%で、民放テレビ五三・八%、NHKテレビ五一・五%と拮抗しているが、「地域や地元の事がよく分かる」「情報源として欠かさない」「知的である」「社会の一員としてこのメディアに触れていることは大切だ」などで五割前後となっており他メディアを引き離している。日本新聞協会広告委員会「ベースメディアと生活者——新しい評価軸を考える」日本新聞協会、二〇一〇年、参照。

(5) 伊藤雅光『計量言語学入門』大修館書店、二〇〇二年、二四頁。

(6) 伊藤、同右書、二四頁。

(7) フロリアン・クルマス、山下公子訳『言語と国家——言語計画ならびに言語政策の研究』岩波書店、一九八七年、三四〇頁。言語計画には席次計画、実体計画、言語習得計画の三つの面がある。

(8) IDFは、ある語が文書中でどの程度特異的に用いられているか（つまり、文書中であまりあらわれない珍しい語である程度）を示す指標である。調査対象の全文書数を当該の語があらわれた文書数で割った上で、その値の（二を底とした）対数をとって、一を加えた値である。語の出現頻度（TF）と掛け合わせた指標TF*IDFが情報科学ではよく用いられるが、ここではジェンダー表現の現れた文書つまり新聞記事の特徴づけることが目的ではなく、ジェンダー表現が経年的にどの程度継続的に用いられているかをみるのが目的であるため、IDFを用いた。なお、語の出現頻度とIDFを掛け合わせた数TF*IDFは、ある調査年に特異的に現れかつ高頻度であると高くなる指標である。これは、記事でいえば、ある時期に集中的にあらわれ、他の時期

には出てこない「キーワード」のようなことはである。調査の目的によってはこの値は有用であるが、本論文では時期をまたいで「しつこく」(定常的に)出てくる表現に注目したので、参考のために付表に入れるにとどめた。

(9) ここからいえることは、ある語の延べ語数は、事件の影響によって急増するということである。それに対し、異なり語数は、こちらの記事内容を反映するものとはいえ、数値的には安定性が高いと考えられる。

(10) 女子大生は、女子大学に学ぶ学生という意味では「女子大一生」で、造語的には他と異なっているが、「女子学生」の意で用いることもあるため、ここに含めた。

(11) 田中和子・女性と新聞メディア研究会、二〇〇九年、前出。

(12) 金田一春彦『日本語』岩波新書、一九八八年。

(13) Denise Daoust, "Language planning and language reform" Florian Coulmas ed., *The Handbook of Sociolinguistics*, Blackwell, 1997, p. 438.

(14) *ibid.*, p. 51.

* 共同執筆者

田中和子(国学院大学法学部教員)、諸橋泰樹(フェリス女学院大学文学部教員)、岡野雅雄(文教大学情報学部教員)、須藤典子(栃木県立国分特別支援学校教員)

付表 1 “女” がかんむりにつくことばの推移

(単位: 件)

“女” 冠詞	読み	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
女優	ジョ	111	77	70	67	86	411	5	1.00	411.00
女兒		1	8	7	8	143	167	5	1.00	167.00
女王		18	18	28	17	15	96	5	1.00	96.00
女医		3	5	1	3	1	13	5	1.00	13.00
女生徒		8	1	3	1	0	13	4	1.32	17.19
女帝		4	2	2	2	3	13	5	1.00	13.00
女学生		2	1	1	0	7	11	4	1.32	14.54
女高生		2	0	2	0	0	4	2	2.32	9.29
女店員		2	0	1	0	0	3	2	2.32	6.97
女囚		1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女官		0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女主人	オンナ	4	3	1	3	0	11	4	1.32	14.54
女主人公		0	2	3	2	1	8	4	1.32	10.58
女教師		5	0	1	0	0	6	2	2.32	13.93
女座長		0	0	6	0	0	6	1	3.32	19.93
女友達		0	2	2	0	2	6	3	1.74	10.42
女スパイ		0	4	0	0	0	4	1	3.32	13.29
女銀行家		4	0	0	0	0	4	1	3.32	13.29
女講師		0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女刑事		0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
女警士		0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女剣劇		1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女エイリアン		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女もっこす		0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女伊達		0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女義太夫		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女警察隊		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女芸人		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女戸主		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女詐欺師		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女三四郎		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女師匠		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女死刑囚		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女私立探偵		0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女事務員		0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女主		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女狩人		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女書生		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女親分		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女水芸人		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32

207 付表（田中ほか）

女仙人	オンナ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女船頭		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女狙撃手		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女探偵		0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女店主		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女杜氏		0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女渡世人		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女闘士		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女忍者		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女番長		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女武者	メ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女漫才師		0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女幽霊		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女神		4	8	2	6	10	30	5	1.00	30.00
延べ語数		180	139	135	117	278	849	—	—	—
異なり語数		25	18	20	17	18	54	—	—	—
タイプ・トークン比 ^注		0.14	0.13	0.15	0.15	0.06	0.06	—	—	—

注：タイプ・トークン比は異なり語数を延べ語数で割った値。

付表 2 “女性” がかんむりにつくことばの推移

(単位: 件)

“女性” 冠詞	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
女性記者	2	2	1	23	10	38	5	1.00	38.00
女性作家	1	9	6	13	7	36	5	1.00	36.00
女性職員	2	7	6	17	3	35	5	1.00	35.00
女性会社員	0	2	8	3	14	27	4	1.32	35.69
女性社員	2	0	4	14	5	25	4	1.32	33.05
女性議員	1	5	17	0	0	23	3	1.74	39.95
女性監督	0	3	7	7	3	20	4	1.32	26.44
女性候補(者)	0	0	19	0	0	19	1	3.32	63.12
女性医師	0	0	0	1	14	15	2	2.32	34.83
女性詩人	0	0	11	3	1	15	3	1.74	26.05
女性歌手	2	1	4	4	2	13	5	1.00	13.00
女性従業員	2	1	0	8	1	12	4	1.32	15.86
女性客	1	3	2	2	3	11	5	1.00	11.00
女性教師	2	2	1	3	3	11	5	1.00	11.00
女性大使	0	6	3	0	0	9	2	2.32	20.90
女性教諭	0	0	1	2	6	9	3	1.74	15.63
女性スタッフ	0	2	2	3	1	8	4	1.32	10.58
女性患者	1	1	0	4	2	8	4	1.32	10.58
女性研究者	2	1	0	2	3	8	4	1.32	10.58
女性技術者	0	0	7	1	0	8	2	2.32	18.58
女性ファン	2	4	0	0	2	8	3	1.74	13.90
女性店員	0	0	2	5	1	8	3	1.74	13.90
女性経営者	1	1	2	1	2	7	5	1.00	7.00
女性市長	0	5	2	0	0	7	2	2.32	16.25
女性秘書	5	0	2	0	0	7	2	2.32	16.25
女性ジャーナリスト	0	1	1	0	5	7	3	1.74	12.16
女性アナウンサー	2	0	1	1	2	6	4	1.32	7.93
女性・女系天皇	0	0	0	0	6	6	1	3.32	19.93
女性会員	1	1	4	0	0	6	3	1.74	10.42
女性立候補	0	0	6	0	0	6	1	3.32	19.93
女性警察官	0	1	4	1	0	6	3	1.74	10.42
女性労働者	0	4	0	1	1	6	3	1.74	10.42
女性グループ	1	3	0	1	0	5	3	1.74	8.68
女性検事	0	0	0	5	0	5	1	3.32	16.61
女性党員	2	0	3	0	0	5	2	2.32	11.61
女性ドライバー	2	1	0	2	0	5	3	1.74	8.68
女性編集者	0	1	1	1	1	4	4	1.32	5.29
女性キャスター	0	0	0	1	3	4	2	2.32	9.29
女性リポーター	1	3	0	0	0	4	2	2.32	9.29
女性議長	3	1	0	0	0	4	2	2.32	9.29

女性候補	0	2	0	0	2	4	2	2.32	9.29
女性国会議員	3	0	1	0	0	4	2	2.32	9.29
女性政治家	3	0	0	0	1	4	2	2.32	9.29
女性シンガー	0	0	2	1	1	4	3	1.74	6.95
女性留学生	3	0	1	0	0	4	2	2.32	9.29
女性ピアニスト	0	0	2	0	1	3	2	2.32	6.97
女性ボーカル	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
女性メンバー	2	0	0	0	1	3	2	2.32	6.97
女性委員	1	1	1	0	0	3	3	1.74	5.21
女性運転手	0	0	0	1	2	3	2	2.32	6.97
女性科学者	0	0	0	2	1	3	2	2.32	6.97
女性画家	1	0	1	1	0	3	3	1.74	5.21
女性幹部	0	1	2	0	0	3	2	2.32	6.97
女性脚本家	0	0	1	0	2	3	2	2.32	6.97
女性局長	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女性刑事	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女性建築家	1	0	0	0	2	3	2	2.32	6.97
女性作曲家	0	0	1	0	2	3	2	2.32	6.97
女性社員	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女性事務職員	0	0	0	2	1	3	2	2.32	6.97
女性社長	0	0	0	3	0	3	1	3.32	9.97
女性選手	2	1	0	0	0	3	2	2.32	6.97
女性前衛芸術家	2	0	0	0	1	3	2	2.32	6.97
女性捜査員	2	0	1	0	0	3	2	2.32	6.97
女性総合職	0	0	0	1	2	3	2	2.32	6.97
女性隊員	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女性大統領	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
女性店長	2	0	0	0	1	3	2	2.32	6.97
女性部下	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女性弁護士	2	1	0	0	0	3	2	2.32	6.97
女性法律家	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女性容疑者	0	0	3	0	0	3	1	3.32	9.97
女性ファイナンシャルプランナー	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女性カメラマン	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性ダンサー	1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女性デザイナー	1	0	0	1	0	2	2	2.32	4.64
女性バーカッション	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性パイロット	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
女性ボーカル	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
女性ボラソティア	1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女性ミイラ	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性ランナー	1	0	0	1	0	2	2	2.32	4.64
女性委員長	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性宇宙飛行士	1	0	0	1	0	2	2	2.32	4.64

女性演歌歌手	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
女性歌人	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
女性課長	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性会長	0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
女性感染者	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
女性銀行員	0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
女性指導者	1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女性事務員	0	1	1	0	0	2	2	2.32	4.64
女性写真家	0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
女性主人公	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性収容者	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
女性証人	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性職人	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
女性川柳作家	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女性代表	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性大臣	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性店主	0	0	1	0	1	2	2	2.32	4.64
女性闘士	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性美容師	0	0	1	0	1	2	2	2.32	4.64
女性副知事	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女性新人候補	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性 PTA 会長	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性 PTA 役員	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性アイドル	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性アシスタント	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性アマチュア	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性アンカー	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性ヴォーカル	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性キャリア	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性キャリア層	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性キュレーター	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性教授	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性クリスチャン	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ゲスト	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ゲリラ	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性コーラスグループ	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性コラムニスト	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性シェフ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性スイマー	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性ディレクター	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性デュオ	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性ドナー	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性トリオ	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性トレーナー	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32

女性ニュースキャスター	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ヌーディスト	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性バト	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ピアノ教師	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性プロデューサー	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性プロ選挙	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ボディビルダー	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性マネージャー	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性ミステリー翻訳家	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ライター	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性ライダー	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性リハビリ治療士	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ロック	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性ロックボーカル	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性暗殺者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性囲碁棋士	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性遺跡説明員	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性運動員	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性営業軍団	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性営業職	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性映画監督	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性英文学者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性園長	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性演劇人	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性演奏家	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性会議議長	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性回答者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性閣僚	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性官僚	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性看護師	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性看守	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性観客	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性企業家	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性起業家	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性救急隊員	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性教員	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性軍人	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性刑事部長	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性芸人	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性剣俠	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性剣士	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性検察事務官	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性元府議	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性顧客	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32

女性公務員	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性考古学者	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性航海士	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性講師	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性講談師	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性国家公務員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性国務長官	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性黒人宇宙飛行士	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性裁判官	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性作業員	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性殺人犯	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性三人組	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性参加者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性市議	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性支店長	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性事務次官	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性事務次官候補	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性実業家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性主事	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性主人	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性首相	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性受刑者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性受講者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性受賞者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性囚	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性助役	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性消費者	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性上院議員	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性上司	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性信徒	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性真打ち	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性親族	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性人気アイドルグループ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性人類学者	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性正社員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性生徒	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性説明員	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性捜査官	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性造形作家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性俗曲師	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性隊長	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性担当者	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性探偵	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性団長	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32

213 付表 (田中ほか)

女性知識人	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性著名人	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性哲学者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性天文学者	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性社長	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性登山家	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性党首	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性投資家	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性独身パート	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性読者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性内定者	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性入権活動家	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性忍者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性白バイ隊員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性判事	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性飛行家	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性表現者	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性不動産会社役員	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性武将	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性兵士	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性保育士	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女性保健調査員	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性冒険セーラー	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性本部長	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性役	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性薬剤師	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女性有権者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性来場者	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女性旅芸入	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女性衆院議員	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数	100	137	180	187	169	773	—	—	—
異なり語数	65	74	73	76	81	246	—	—	—
タイプ・トークン比	0.65	0.54	0.41	0.41	0.48	0.32	—	—	—

付表 3 “女子” がかんむりにつくことばの推移

(単位: 件)

“女子” 冠詞	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
女子高生	5	3	41	13	40	102	5	1.00	102.00
女子生徒	8	1	9	33	28	79	5	1.00	79.00
女子学生	10	7	10	4	19	50	5	1.00	50.00
女子大生	13	11	6	6	13	49	5	1.00	49.00
女子中学生	29	0	6	7	5	47	4	1.32	62.13
女子高校生	4	1	12	4	14	35	5	1.00	35.00
女子児童	1	0	3	1	12	32	4	1.32	42.30
女子中高生	0	0	8	0	2	10	2	2.32	23.22
女子社員	3	2	2	0	0	7	3	1.74	12.16
女子職員	3	4	0	0	0	7	2	2.32	16.25
女子短大生	0	0	1	5	0	6	2	2.32	13.93
女子大生社長	0	0	5	0	0	5	1	3.32	16.61
女子選手	1	1	0	0	2	4	3	1.74	6.95
女子留学生	2	2	0	0	0	4	2	2.32	9.29
女子行員	1	3	0	0	0	4	2	2.32	9.29
女子労働者	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
女子プロレスラー	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
女子アナ	0	0	0	3	0	3	1	3.32	9.97
女子従業員	1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女子工員	1	0	0	1	0	2	2	2.32	4.64
女子マネージャー	0	0	1	0	1	2	2	2.32	4.64
女子プロ	0	1	0	1	0	2	2	2.32	4.64
女子挺身隊	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女子中学三年生	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女子高専生	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女子教員	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女子医学生	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女子プロレスラー 議員	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女子アナウンサー	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女子奉仕部員	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子店員	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子中生	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女子大学生	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女子体操選手	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女子世界代表	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子書記局員	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子主将	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女子合格者	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子公務員	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子看護学生	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32

215 付表 (田中ほか)

女子会社員	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子パートタイマー	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女子コーチ	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女子グループ	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数	95	42	105	81	149	487	—	—	—
異なり語数	24	15	13	14	17	44	—	—	—
タイプ・トークン比	0.25	0.36	0.12	0.17	0.11	0.09	—	—	—

付表 4 “女流” がかんむりにつくことばの推移

(単位: 件)

“女流” 冠詞	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
女流作家	12	10	0	0	1	23	3	1.74	39.95
女流棋士	0	2	5	1	0	8	3	1.74	13.90
女流陶芸家	1	4	0	0	0	5	2	2.32	11.61
女流画家	1	1	0	0	0	2	2	2.32	4.64
女流詩人	0	0	1	1	0	2	2	2.32	4.64
女流音楽家	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
女流作曲家	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
女流日本画家	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
女流義太夫	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
女流かな書道家	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流デザイナー	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流バイオリニスト	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流演出家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流建築家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流史家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流四冠王	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女流書画家	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女流生け花作家	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流奏者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女流評論家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流舞踊家	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流文学者	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
女流書家	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
女流俳人	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
延べ語数	24	19	10	5	5	63	—	—	—
異なり語数	12	6	5	4	4	24	—	—	—
タイプ・トークン比	0.50	0.32	0.50	0.80	0.80	0.38	—	—	—

付表 5 “男” がかんむりにつくことばの推移

(単位：件)

“男” 冠詞	読み	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の 数	IDF	TF*IDF
男児	ダン	0	8	9	10	63	90	4	1.32	118.97
男優		2	1	6	0	4	13	4	1.32	17.19
男神		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男生徒		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男友達	オトコ	0	4	0	0	1	5	2	2.32	11.61
男エイリアン		0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男オバサン		0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男先生		1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数		4	13	15	12	69	113	—	—	—
異なり語数		3	3	2	3	5	8	—	—	—
タイプ・トークン比		0.75	0.23	0.13	0.25	0.07	0.07	—	—	—

付表 6 “男性” がかんむりにつくことばの推移

(単位: 件)

“男性” 冠詞	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
男性会社員	0	1	12	12	12	37	4	1.32	48.91
男性教諭	0	3	1	13	13	30	4	1.32	39.66
男性職員	0	1	0	12	1	14	3	1.74	24.32
男性社員	0	2	1	6	3	12	4	1.32	15.86
男性巡査長	0	0	0	0	11	11	1	3.32	36.54
男性患者	0	0	3	2	5	10	3	1.74	17.37
男性教師	1	0	1	0	7	9	3	1.74	15.63
男性店員	0	0	0	3	6	9	2	2.32	20.90
男性従業員	0	0	2	2	3	7	3	1.74	12.16
男性客	0	0	0	3	4	7	2	2.32	16.25
男性教員	0	0	0	6	0	6	1	3.32	19.93
男性運転手	0	0	0	3	2	5	2	2.32	11.61
男性医師	0	0	0	0	5	5	1	3.32	16.61
男性正社員	0	0	0	0	5	5	1	3.32	16.61
男性記者	0	1	0	1	1	3	3	1.74	5.21
男性キャスター	1	0	0	2	0	3	2	2.32	6.97
男性歌手	0	2	0	0	1	3	2	2.32	6.97
男性作業員	0	0	1	0	2	3	2	2.32	6.97
男性教授	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
男性船員	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
男性美容師	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
男性デュオ	0	0	1	0	1	2	2	2.32	4.64
男性棋士	0	1	1	0	0	2	2	2.32	4.64
男性議員	0	1	1	0	0	2	2	2.32	4.64
男性局員	0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
男性編集者	0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
男性歌人	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
男性会員集計	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
男性外科医師	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
男性刑務官	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
男性経営者	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
男性警部補	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
男性候補	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
男性巡査部長	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
男性 3 佐	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性アイドル	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性アイドルグループ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性アイドル歌手	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性アルバイト	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性アルバイト店員	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32

219 付表 (田中ほか)

男性ガードランナー	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性ガイド	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性カメラマン	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性カルテット	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性がん患者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性スタイリスト	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性スタッフ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性ソフトボール指導員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性ダンサー	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性バネリスト	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性ファン集計	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性プログラマー	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性ポップデュオ	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性ミイラ	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性モデル	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性ランナー	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性課長	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性管理職	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性管理人	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性祈禱師	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性喫煙者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性警部	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性研究者	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性顧客	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性航法士	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性作家	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性歯科医	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性主治医	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性受刑者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性諸氏	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性助産士	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性消防司令	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性上司	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性乗客	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性清掃員	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性隊員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性担任	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性店主	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性店長	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性同性愛者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性読者	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性入所者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性俳優	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性被告	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32

男性副検事	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
男性副主幹	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性兵士	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性弁護士	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男性役員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性薬剤師	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性容疑者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性理事	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男性立候補予定者	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男性流行歌手	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数	5	23	38	83	125	274	—	—	—
異なり語数	5	18	22	29	50	94	—	—	—
タイプ・トークン比	1.00	0.78	0.58	0.35	0.40	0.34	—	—	—

付表7 “男子” がかんむりにつくことばの推移

(単位: 件)

“男子” 冠詞	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
男子生徒	6	8	14	11	67	106	5	1.00	106.00
男子学生	2	3	1	1	15	22	5	1.00	22.00
男子高校生	2	0	6	2	1	11	4	1.32	14.54
男子児童	0	0	0	2	4	6	2	2.32	13.93
男子大学生	0	0	1	1	2	4	3	1.74	6.95
男子中学生	0	0	1	0	2	3	2	2.32	6.97
男子選手	0	0	0	3	0	3	1	3.32	9.97
男子高生	1	0	1	0	0	2	2	2.32	4.64
男子グループ	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男子監督	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男子警察官	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男子皇族	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男子小学生	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男子新入社員	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男子吹奏楽隊	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
男子中学三年	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
男子部長	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
男子留学生	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数	14	12	27	21	93	167	—	—	—
異なり語数	7	3	9	7	8	18	—	—	—
タイプ・トークン比	0.50	0.25	0.33	0.33	0.09	0.11	—	—	—

付表 8 女性の性を含み込んだ職業語

(単位: 件)

職 業 語	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の 数	IDF	TF*IDF
看護婦	6	37	34	66	13	156	5	1.00	156.00
OL	43	35	18	10	13	119	5	1.00	119.00
ヒロイン	0	1	16	10	17	44	4	1.32	58.16
従軍慰安婦	0	0	0	2	26	28	2	2.32	65.01
娼婦	1	7	9	1	4	22	5	1.00	22.00
保母	5	6	8	1	2	22	5	1.00	22.00
助産婦	0	4	13	5	0	22	3	1.74	38.21
ホステス	5	1	2	11	0	19	4	1.32	25.12
家政婦	4	9	4	2	0	19	4	1.32	25.12
保健婦	0	2	8	9	0	19	3	1.74	33.00
(元)慰安婦	0	0	18	0	0	18	1	3.32	59.79
おかみ(さん)	0	0	15	0	0	15	1	3.32	49.83
(元)従軍慰安婦	0	0	14	0	0	14	1	3.32	46.51
遊女	0	4	5	1	3	13	4	1.32	17.19
生保レディー	0	0	12	0	0	12	1	3.32	39.86
乳母	0	6	0	1	4	11	3	1.74	19.11
魔女	0	0	6	3	2	11	3	1.74	19.11
代理母	0	0	0	0	11	11	1	3.32	36.54
キャリアウーマン	4	1	2	1	2	10	5	1.00	10.00
海女	1	5	4	0	0	10	3	1.74	17.37
慰安婦	0	0	0	7	3	10	2	2.32	23.22
スチュワーデス	1	0	8	0	0	9	2	2.32	20.90
ウェイトレス	0	0	2	3	3	8	3	1.74	13.90
歌姫	0	0	2	4	2	8	3	1.74	13.90
修道女	0	3	3	0	2	8	3	1.74	13.90
お姫様、姫	0	0	8	0	0	8	1	3.32	26.58
女中	0	3	1	3	0	7	3	1.74	12.16
芸者	0	7	0	0	0	7	1	3.32	23.25
マドンナ	0	0	0	3	3	6	2	2.32	13.93
ファーストレディー	2	3	0	0	0	5	2	2.32	11.61
マスコットガール	0	0	4	1	0	5	2	2.32	11.61
クラブのママ(又は「ママ」)	0	5	0	0	0	5	1	3.32	16.61
ワンギャル	0	0	0	5	0	5	1	3.32	16.61
王女	0	0	5	0	0	5	1	3.32	16.61
商売女	0	5	0	0	0	5	1	3.32	16.61
女郎	1	2	0	0	1	4	3	1.74	6.95
寮母	2	1	0	0	1	4	3	1.74	6.95
ギャル	0	0	3	0	1	4	2	2.32	9.29
コギャル	0	0	1	3	0	4	2	2.32	9.29
マッサージ嬢	1	0	3	0	0	4	2	2.32	9.29

223 付表 (田中ほか)

侍女	0	3	1	0	0	4	2	2.32	9.29
従軍看護婦	1	0	0	0	3	4	2	2.32	9.29
付添婦	1	0	3	0	0	4	2	2.32	9.29
キャンペーンガール	0	0	0	4	0	4	1	3.32	13.29
ママ	0	0	0	4	0	4	1	3.32	13.29
婦長	0	0	1	1	1	3	3	1.74	5.21
看板娘	0	0	0	1	2	3	2	2.32	6.97
女将	0	1	0	0	2	3	2	2.32	6.97
売春婦	0	1	0	0	2	3	2	2.32	6.97
おかみ	0	0	0	3	0	3	1	3.32	9.97
キャンペーンレディー	0	0	3	0	0	3	1	3.32	9.97
ママさん医師	0	0	0	0	3	3	1	3.32	9.97
花魁	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
バレリーナ	0	0	0	1	1	2	2	2.32	4.64
産婆	0	0	1	1	0	2	2	2.32	4.64
踊り子	1	0	0	1	0	2	2	2.32	4.64
(スナック・クラブの)ママ	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
ウグイス嬢	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
おいらん	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
おかみさん	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
コールガール	0	2	0	0	0	2	1	3.32	6.64
モデル嬢	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
主婦パート	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
情婦	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
尼	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
秘書嬢	2	0	0	0	0	2	1	3.32	6.64
婦人	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
OL嬢	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
イメージガール	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
キャンギャル	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
クラブママ	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
ご婦人	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
ショーガール	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
セールスウーマン	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
セクシーアイドル	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
ソープランド嬢	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
デート嬢	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
ドラマクイーン	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
なでしこ火消し	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
ネオナチ・ガール	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
ネクタイ姫	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
ネクタイ娘	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
パート	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
パート社員	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32

パズルレディー	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
バットガール	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
ビジュアルクイーン	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
ファースト・ナース	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
ホテル嬢	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
ボンドガール	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
マダム・ミニスター	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
ミスグアム	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
ミス中央区	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
メイド	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
リポーター諸嬢	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
営業ウーマン	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
下女	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
会社員女性	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
革女	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
看板女性	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
帰国子女	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
姑娘(クーニャン)巡查	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
雇われマダム	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
腰元	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
淑女	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
女官長	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
女流	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
水商売の女性	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
選炭婦	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
窓口嬢	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
店のママ	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
尼さん	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
乳人	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
売笑婦	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
舞妓	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
風俗嬢	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
保育ママさん	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
巫女	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数	89	162	257	182	149	839	—	—	—
異なり語数	24	31	48	44	45	118	—	—	—
タイプ・トークン比	0.27	0.19	0.19	0.24	0.30	0.14	—	—	—

付表 9 男性の性を含み込んだ職業語

(単位: 件)

職 業 語	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の 数	IDF	TF*IDF
サラリーマン	39	77	43	28	187	4	1.00	187.00
OB	0	59	4	43	106	3	1.42	149.99
カメラマン	10	25	19	2	56	4	1.00	56.00
スポークスマン	0	15	30	8	53	3	1.42	75.00
証券マン	46	0	2	0	48	2	2.00	96.00
ヒーロー	0	12	16	13	41	3	1.42	58.02
ビジネスマン	3	4	17	11	35	4	1.00	35.00
ホスト	3	20	2	0	25	3	1.42	35.38
オンブズマン	0	19	1	1	21	3	1.42	29.72
営業マン	1	9	11	0	21	3	1.42	29.72
神父	0	14	0	2	16	2	2.00	32.00
商社マン	5	2	3	3	13	4	1.00	13.00
英雄	0	6	4	3	13	3	1.42	18.40
スポーツマン	1	2	6	0	9	3	1.42	12.74
紳士	0	2	2	4	8	3	1.42	11.32
皇子	0	7	0	0	7	1	3.00	21.00
車夫	0	0	6	0	6	1	3.00	18.00
セールスマン	0	1	4	0	5	2	2.00	10.00
ジャズマン	1	2	1	0	4	3	1.42	5.66
キーマン	0	0	3	1	4	2	2.00	8.00
チェアマン	0	3	1	0	4	2	2.00	8.00
リードオフマン	0	2	2	0	4	2	2.00	8.00
銀行マン	1	3	0	0	4	2	2.00	8.00
若武者	0	1	0	3	4	2	2.00	8.00
ラッキーボーイ	0	0	0	4	4	1	3.00	12.00
殿様・殿サマ	0	4	0	0	4	1	3.00	12.00
サムライ	0	0	2	1	3	2	2.00	6.00
看護師	0	1	2	0	3	2	2.00	6.00
広報マン	2	0	0	1	3	2	2.00	6.00
政策マン	1	2	0	0	3	2	2.00	6.00
ガードマン	0	0	3	0	3	1	3.00	9.00
ジェントルマン	0	0	0	3	3	1	3.00	9.00
電通マン	3	0	0	0	3	1	3.00	9.00
ウェーター	0	1	1	0	2	2	2.00	4.00
スーパーマン	0	0	1	1	2	2	2.00	4.00
マスター	0	1	1	0	2	2	2.00	4.00
バットボーイ	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
ヒットマン	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
フリーカメラマン	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
ラグーマン	0	2	0	0	2	1	3.00	6.00

ワンマン	0	0	0	2	2	1	3.00	6.00
下男	2	0	0	0	2	1	3.00	6.00
貴公子	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
剣闘士	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
侍	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
保父	0	2	0	0	2	1	3.00	6.00
狼男	0	0	2	0	2	1	3.00	6.00
4 回戦ボーイ	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
G メン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
P R マン	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
アイデアマン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
アイディアマン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
アンカーマン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
イエスマン	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
お坊さん	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
カウボーイ	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
ガンマン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
ゴッドファーザー	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
スタントマン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
ソムリエ	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
チェックマン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
テレビマン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
バットマン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
ビジネス戦士	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
プレーボーイ	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
フレッシュマン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
ボーイ	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
ボーイスカウト	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
ボールボーイ	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
ボス	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
ホテルマン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
マエストロ	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
ラインマン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
ルーキー	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
騎士	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
筋肉マン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
金融マン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
広告マン	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
行政マン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
山男	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
車父	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
准看護師	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
女形	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
商品企画マン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00

227 付表 (田中ほか)

宣伝マン	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
畜男	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
亭主	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
都銀マン	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
都庁マン	1	0	0	0	1	1	3.00	3.00
武士	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
武者	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
武将	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
武人	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
暴走バイク野郎	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
幕内力士	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
延べ語数	119	314	218	148	799	—	—	—
異なり語数	15	44	50	33	95	—	—	—
タイプ・トークン比	0.13	0.14	0.23	0.22	0.12	—	—	—

注： 1985年については計数を行っていないため、表から除外した。

付表10 他者との関係で女性があらわされることば

(単位: 件)

他者との関係での語	1985	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
主婦	259	126	145	121	108	759	5	1.00	759.00
夫人	144	72	95	36	46	393	5	1.00	393.00
奥さん	28	12	0	10	9	59	4	1.32	77.99
女房	21	9	16	7	3	56	5	1.00	56.00
皇后	0	0	0	22	30	52	2	2.32	120.74
嫁	25	4	0	8	6	43	4	1.32	56.84
姑	11	6	0	4	14	35	4	1.32	46.27
(お)嫁(さん)	0	0	29	0	0	29	1	3.32	96.34
王女	0	2	0	21	4	27	3	1.74	46.90
花嫁	13	5	2	0	4	24	4	1.32	31.73
未亡人	11	8	0	1	0	20	3	1.74	34.74
奥さん(奥さま)	0	0	17	0	0	17	1	3.32	56.47
お嬢さん	8	5	2	0	0	15	3	1.74	26.05
姑	0	0	15	0	0	15	1	3.32	49.83
家内	9	1	0	3	1	14	4	1.32	18.51
とつぐ	6	0	5	0	0	11	2	2.32	25.54
愛妻	2	1	0	2	5	10	4	1.32	13.22
内妻	9	0	0	0	0	9	1	3.32	29.90
奥様	0	0	0	1	7	8	2	2.32	18.58
内縁の妻	0	0	0	0	8	8	1	3.32	26.58
先妻	3	4	0	0	0	7	2	2.32	16.25
養女	0	1	6	0	0	7	2	2.32	16.25
ファーストレディー	0	0	0	0	7	7	1	3.32	23.25
乙女	0	2	4	0	0	6	2	2.32	13.93
令嬢	0	4	0	0	2	6	2	2.32	13.93
おかみさん	0	0	4	0	1	5	2	2.32	11.61
カミさん	4	0	1	0	0	5	2	2.32	11.61
後妻	3	0	2	0	0	5	2	2.32	11.61
若妻	1	0	4	0	0	5	2	2.32	11.61
新婦	0	0	4	0	1	5	2	2.32	11.61
姫	0	0	0	3	2	5	2	2.32	11.61
嫁入り	5	0	0	0	0	5	1	3.32	16.61
嫁にいく	3	1	0	0	0	4	2	2.32	9.29
専業主婦	0	0	0	0	4	4	1	3.32	13.29
大姑	0	4	0	0	0	4	1	3.32	13.29
まな娘	2	0	0	0	1	3	2	2.32	6.97
奥方	0	0	0	2	1	3	2	2.32	6.97
寡婦	0	0	2	0	1	3	2	2.32	6.97
妾	2	0	0	0	1	3	2	2.32	6.97
王妃	0	0	0	3	0	3	1	3.32	9.97

229 付表 (田中ほか)

小嫁	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
人妻	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
前妻	0	3	0	0	0	3	1	3.32	9.97
おかみ	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
お姑さん	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
お袋	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
シングルマザー	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
人妻	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
愛人	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
恐妻	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
新妻	0	0	0	0	2	2	1	3.32	6.64
妃	0	0	0	2	0	2	1	3.32	6.64
有職主婦	0	0	2	0	0	2	1	3.32	6.64
愛妻	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
お嫁さん	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
お嬢ちゃん	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
お姫さま	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
カミサン	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
かみさん	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
小娘	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
淑女	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
処女	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
先妻	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
前夫人	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
継母	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
未亡人	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
娘さん	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
妾	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
モーザ妃	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
嫁入り	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
ヨメさん	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
ロメーヌ嬢	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
愛妾	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
縁遠い	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
嫁きおくれ	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
嫁す	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
嫁にする	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
嫁にやる	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
嫁をもらう	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
嫁女	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
家庭に入る	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
玉のこしにのる	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
兄嫁	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
古女房	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32

御寮さん	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
出戻り娘	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
処女	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
小姑	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
情婦	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
新妻	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
仁徳天皇妃	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
正妻	0	0	1	0	0	1	1	3.32	3.32
聖母	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
大しゅうとめ	0	0	0	1	0	1	1	3.32	3.32
貞女	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
内縁の奥さん	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
内縁者	0	0	0	0	1	1	1	3.32	3.32
娘さん	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
老嬢	0	1	0	0	0	1	1	3.32	3.32
老妻	1	0	0	0	0	1	1	3.32	3.32
延べ語数	579	281	370	258	287	1775	—	—	—
異なり語数	31	26	32	26	39	100	—	—	—
タイプ・トークン比	0.05	0.09	0.09	0.10	0.14	0.06	—	—	—

付表11 他者との関係で男性があらわされることば

(単位: 件)

他者との関係での語	1991	1996	2001	2006	総計	出現年 の数	IDF	TF*IDF
皇太子	0	0	32	34	66	2	2.00	132.00
主人	19	22	10	1	52	4	1.00	52.00
王子	0	0	21	14	35	2	2.00	70.00
亭主	2	0	2	6	10	3	1.42	14.15
旦那(さん)	0	1	1	6	8	3	1.42	11.32
親王	0	0	0	8	8	1	3.00	24.00
子息	0	4	2	0	6	2	2.00	12.00
夫君	6	0	0	0	6	1	3.00	18.00
亡夫	5	0	0	0	5	1	3.00	15.00
主夫	2	0	1	0	3	2	2.00	6.00
新郎	0	1	0	2	3	2	2.00	6.00
皇太子さま	0	0	0	3	3	1	3.00	9.00
娘婿	0	3	0	0	3	1	3.00	9.00
御曹司	0	0	1	1	2	2	2.00	4.00
ご主人	0	0	0	2	2	1	3.00	6.00
ご亭主	0	0	0	2	2	1	3.00	6.00
せがれ	0	2	0	0	2	1	3.00	6.00
婿	0	0	0	2	2	1	3.00	6.00
お坊ちゃん	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
ご夫君	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
ヤンパパ	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
家人	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
花婿	0	1	0	0	1	1	3.00	3.00
皇子	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
若だんな	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
若君	0	0	1	0	1	1	3.00	3.00
女婿	1	0	0	0	1	1	3.00	3.00
親王殿下	0	0	0	1	1	1	3.00	3.00
延べ語数	35	37	73	83	228	—	—	—
異なり語数	6	10	11	14	28	—	—	—
タイプ・トークン比	0.17	0.27	0.15	0.17	0.12	—	—	—

注: 1985年については計数を行っていないため、表から除外した。